

522

144



始



六十七

522-144



永見徳太郎著

發  
兌

東  
京  
都

表

現

社

染

州

大正  
13. 2. 20  
内交

### 序のやうな會話

客 君は戯曲集を出版するさうだね。

主人 うん、出す事にしてやつと原稿の整理が出来たところだよ。

客 いろんな事業に關係して居る忙しい身体なのに、よくそんな面倒臭い事をやるなめ。

主人 僕の性格として、忙しければ忙しいだけ、いろんな方面に手を出して見たいのだよ、多情多感の心理所有者だから。

客 アハ………、相變らず永見式で面白い言葉だ。戯曲を書き初めたのは、

二  
ごんな動機が有つたのかい。

主人 戯曲を書く様になつた動機は、いろ／＼あるのだけれき、研究の第一歩をすゝめたのには、或異性の力が大をなして居るよ、僕はその異性に對して感謝して居る譯さ。

客 誰だい。

主人 誰でもいゝさ、異性と言ふからには、美しい艶麗な女と思えば相違なしさアハ…………。

客 何んだか惚氣見たいだね、一寸でもいゝから聞かせて下れたまえよ。

主人 そりや愉快なテーマなんだか、うっかりテイソレミ漏らす可からずさ、近い日にその事件を取扱つて長編小説に書きあげるのだから、その時ゆつくり

読んで下れたまえ。

客 じゃ、それを楽しみに待つてゐよ。

主人 僕の戯曲に就いては、もう一人感謝す可き人があるんだ。その人は海外貿易史料の大家古賀十二郎氏だ。この人は僕に何時も史談を惜しけもなく聞かして下れるんだ、僕は此の古賀氏に依つて何れだけ、受けた力が大であるかといふ事を察つして下れたまえ。

客 古賀氏か、あの人は現代に稀な歴史家だね。長崎の天地から去らない隠れたる大家だ。

主人 そうだとも僕も、古賀氏の様に、自分一人て楽しまうかと思つて居るが、創作だからやはり大勢の方々に擴く読んで戴いて、遠慮なく批評をして貰い

たいのだ。僕は専門家じゃないデレツタントの作家だから、僕の書いたものには、可なり悪いところもあるだらうし、又善いところもあると思ふよ。日本には何故デレツタントの作家が力強く生れ出ないんだらうか、是からの文學には未だくゝ開拓して無い路が澤山にあると思ふが。

客　そりや眞實だね、僕は君の様な作家が現れた事を大に痛快に思つて居るよ大にやりたまへやりたまへ。

主人　やるこも、大にやるよ、思ふまゝをビクつかないでグン／＼書いて行くのだ、丁度今の僕には創作慾が盛んに湧きおこつて居るからね。

(大正十三年一月)

目次

大時化の後 (二幕) .....	二頁
島原亂の一挿話 (二幕) .....	三三頁
女優の睨み女優の涙 (二幕) .....	九二頁
陶物師陳八官 (二幕) .....	一〇二頁
黒坊の歡樂と悲哀 (二幕) .....	一四九頁
東京文 (一幕) .....	二二九頁
八岐大蛇 (一幕) .....	二四七頁

大時化の後

大時化の 後 (二幕)



村役場の人 四十歳位

備	伯	娘	妻	夫
室	父	老	十	三
二	十	六	七	歳
人	人	歳	前	後
			十	何
			四	歳

醫者老人

其他大勢の村人

所

肥前國茂木村。

時

現代、初夏の夜。

舞臺

正面に漁夫谷藏の家。

前庭には廢物の漁具、いろ／＼取り散らされて在る。

下手、上手一面に枇杷の樹茂る。背景は閨の中に海有りて浪の音騒々しく聞ゆ。

二

谷藏の家は障子等開け放たれて、室の中央の吊ランプに灯を點せられ、ほんやりした光りに薄穢ない室内が眺められる。壁の隅には一挺の三味線立てかけられ、その上部には神棚ありて金比羅様を祭り、御燈明の光り輝いて居る。

足の不自由な伯父は、蒲團の上に胡坐かき、心配さうな顔付をして腕組み乍ら黙々と考へに就つて身動きをもしない。前庭の縁には尋ねて來た側室が、腰かけ乍ら巻煙草を吹かしつゝ此の家の娘と話したつゞけて居る。側室は瘦せぎすな肉付きで阿娜つほいとゝろが有つて立派な服装の所有者。

側室 ほんごに、お前は感心な、善良娘たい。

娘 妾が頼んけん、何處てん行く。

側室 そんなまで、藝者になつたかこなら、丁度今よか事が居るですばい！

三



娘 そぎやん事のう？。

側室 妾がもこ、勤めて居た女將の家でも、抱妓を二人程一生懸命探しみんなはる。

娘 やつば。長崎の丸山のう？

側室 丸山ばの。

娘 さうぞ、丸山に連れて行きます。

側室 此家の人達さへ承知して下なはるこ、何日でもよかこですたい。明日からでも明後日からでも……。

娘 (雀躍するやうにして)頼んけん妾、は藝者にさせて下れまつせ。

側室 お父さんかお母さんかに、話してはしたこの。

娘 お母に話しばしこつこばつてん、まだお父も伯父もなあんも返事は言はん。

四

側室 お母様は、さんけん言ふみんなはつたの！

娘 黙つて笑うちよらつこばの。

側室 賛成して下れなはるこ、幸福ばつてんか。

娘 そぎやんたなもし、お母も大概よかごたるじやかなもし、あの伯父が……。

側室 八ヶ間敷かこの……。

娘 (頷く)……。

側室 そんなら、如何仕様か、……さんけん好いこるこば……妾から話してやらうか。

娘 そぎやんして下れまつせ。

側室 そんなら話し、てやらう……。 (伯父に向ひて)伯父さん、伯父さん。

伯父は不機嫌さうな顔をあげて。

五

伯父 何んか？

側室 あなたに妾から折入つての頼みが有つて下さい。

伯父 ……。

側室 この娘さん事ですばい、以前から藝者になつ度かく言つてんなはるけん可哀想です、早やう藝者にしてやりませ。

伯父 本氣で娘が言うこつこなもし。

側室 三味線のお師匠さん先刻橋の上で逢つたら、ひさう上手になつて手すじのよか言うて褒めて居んなはつた……。

伯父 (怒氣を含んで) 藝者……あんたは藝者ばして居らしたけれ、娘が藝者になる事ばよか思はずけん……今、家の中はそぎやんごころじやなか、こぎやんして毎日々々弟の事

ば心配しちやう、弟の行衛がまだ分らんけん氣ばもんじよるじやかなもし？。それに呑氣か娘も娘、(娘を睨んで) お前がお父が歸らんじやつか？。馬鹿！。

側室 そりや混雜のこころにこんな話しをしたきは妾が悪かつた下さい。……まあ、よく考へておいて……妾は此娘さんが大好きで……。

妾は伯父に叱られて泣いてゐる。

伯父 (火の如く怒り) お前がこたる男泣かせは行け、早やう行けよ、穢しか、いくら貧乏しても女が大切なもんば金錢に換へる了見は持たんだい。

側室 (ムツミして) そんなに怒りなはつミ、話しも何もなかですたい、妾も同情して話しをしつミです、そんけん大聲で銅鳴散らさんでもよかじやんせんか？。

伯父 町に出けば皆が生意氣なる、お前が此の村に居つた時分、鼻汁垂れこつたじやつ

か……。

側室 なあんでもよかですたい……妾は此家の娘の爲を思つて……。

伯父 娘が爲め……。

側室 さうですたい。

伯父 こん畜生、娘は世話して儲きゆだいこもて。

側室 (反抗して)失禮乍ら、お金はいくらでも妾は、もつこりますばい。

伯父 側室が何あんか？

側室 へえ、妾は側室です、ばつてんか、一生漁夫て終る人を可哀想に思ひますたい。

伯父 貧乏ばしてん、あぶく錢な取らんざい。

側室 何があぶく錢です。

八

伯父 そぎやんピカ／＼したよか着物ば、あぶく錢で、買うちやつて。

側室 (ヒステリックに)何ですて、ボロの衣服をきて居るくせに……乞食のやうにして。

伯父 (大聲にて)もう一度言つて見ろ！

側室 乞食。

伯父 うぬ。(背後に手をまわし、三味線を投げつける、三味線庭石にあたりて折れる)

側室 (身を交して)鬼のやうな人間のわきに居るこ恐ろしか、……氣狂ひ爺。

伯父 こん畜生！

娘 伯父々々々々。

伯父が、縁ばたに居坐り出やうとするのをとめて居る。

側室 (聲を震はして)村會議員達に言つけてやるから、おほえこりまつせ。

九

劍室去る。

娘は悲しきうに三味線を拾ひ片づける長い間たつ。

伯父 もう浪も静なつて、風も中止だけんお父も歸つて來らつじやらう。

娘 (不安想な顔)……。

伯父 (機嫌をなほして)此間からあぎやん大漁がついたけん、村の若男たちや船に乗つて行たら、すぐ今度のごたつ大時化になつた、ほんに俺も若か時漁夫稼に忙しゆうして來た、こぎやん時化は初めて。さうぞ皆が無事で居ればよか。……(海には遙かに漁船が三隻澤山な灯をこもして揺れて來る。伯父脊後を振り返へり)あ、あそこに搜索船が……三隻歸つた。さうぞ達者で弟が戻つて下れ、ばよか。……お前も大分心配したらう。

娘 (頷いて)昨夜も一昨夜も寝んじやつた。

伯父 そぎやんじやらう。そぎやんじやらう。……お父がきつこ達者な顔をして戻つて來たら、よく孝行を聞けよ。よか、い。

娘 ウン。

伯父 お前が此頃いくら三味線ば好いこつたつちや、あんまり一所懸命になつちやいけん、そぎやん心配して居るか知つこるか?。お前、如何して三味線ば、そぎやん習いたかこか。

娘 ……妾、藝者になつたかもん!

伯父 ウーン、如何してかい。

娘 (言ひ憎さうにして)……。

伯父 何故かい。

娘 藝者になつて、美麗衣服ば着て、白粉ば塗けてほんなこも、よかじやかのう！。

伯父 そりや、こぎやん田舎娘に相違て、白粉も塗れば、口紅もつくるもん。けれど一番下等か商賣さい。穢多よりも見下されこつこばよ。

娘 ……。

伯父 今の奴女さんにあんまり近よんな、だまさるけんな。

娘 (軽い反感の心持) こぎやん言はれたつちやよか、女に生れた甲斐に美しうなつこが一生の徳じやかの。

伯父 美しうなつて？……。成程娘の兒にしてはさう思ふかも知れん、そぎやん言ふたつちや、美しうなるばつかしが人間に生れた目的じやなかこばい。

娘 悪う言はれてもかんまん、藝者にならうこもして、たまらんもん。

伯父 淺はかな考へたい。そるが此頃流行の虚榮じやらう。體裁ばかりつくつて暮す。

藝者は男の弄び物、玩具に同じ事ばよ、俺達の家からそぎやん娘が生れたこ云はれちや廣い世間に顔出しん出来るもんか。

娘 ……。

伯父 やつぱりあの女が藝者になれ言うたつじやらう。此村から長崎の町に出て藝者しちやるもんが多かけん……長吉つあんの娘を見て見ろ、此間お前も新聞にのつちよつたこ

いふこつたらう、何にか云ふ呉服屋の番頭と鐵道往生をした事ば……。

娘 (話しが耳に入らぬ様にして、沖を眺める) ……。

伯父 そつからお峯つあんの妹、あの娘兒もお客と旅の宿屋に泊つて居たこもが八ヶ間敷

なつて警察署に引張られたりしたげな。な。此の伯父は悪かこは言はん、ヤツバリ漁夫の娘は漁夫の嫁になれ。

娘 妾は漁夫は大嫌。こぎやん村中が引くりかへる様騒ぐは、此大時化の爲めじやらうのう。妾は自分のお母はヂット見まつたまらんご涙出る、お父が漁夫てさが無かつたら、こぎやん沖が土用浪で荒りゆうが、大風が吹かうがよかばつてん？

伯父 ……。

娘 妾、漁夫の家に居う事は好かん。

伯父 そんなら百姓の家に嫁け。……自分の事は考へじやつまらん、お前先刻の女や二三軒先の藤十郎さんの娘が華美か風はして時々來ちやいけん、羨やましゆう考ゆつこじやらう、そるばつてんか、あの娘達は村に來るご豪らさうな高慢た顔して何んか？、町の

人の側室げな、側室ミゆうて色を漁る男の奴隷たい。  
娘 ……。

沖の火、段々近くなる。

伯父 俺、お前のたつた一人の伯父のけん悪うは言はん、思ひ直せ、きつこ老人から後悔ゆるぞ、俺若時體を押してこぎやん大浪の中でも漕ぎ抜くつこが大自慢じやつた、そつ丈け力自慢て村角力の有る時、いつてん明神様の土俵て近村の人達ミ角力しては勝つてばかり居つた、其るが爲め大阪角力の仲間になつて、身體が自由のきかんどこなつて國に歸へつたらこぎやん若時の無理が出て、一寸動くのにも骨が折るつこたい、そつてお前の親御に世話になつこたい。是もいふ事は聞かず好き事ばつかして、人のこむつこも聞かずに角力取りになつた天罰だい。……そつこ同じ事。お前が藝者になつこは

考へ直して年頃になつたら人のよか男にゆけ。

娘 ……。

伯父 (沖を見て) もう、船が近から来たさうぞ是て無事に戻つて下れ、ばよかが。

伯父と娘、沖を見詰める。

家の裏の道を、村の大勢、男女の老人や子供等沖を眺めて、オーイ／＼と呼び乍ら下手よりより上手に通り返ぐ、

船の方よりもオーイ／＼と叫んで居るらしい聲がする。

娘 妾も濱に行かう。

上手の方に馳け去る。

伯父 (獨白) 萬一事の有つて二體さぎやんなつてさじやらうかい、俺さぎやんな風で働くこ

この出来ん身體のけん、あにに残つては若妻、娘はつかし。(沖を振り返へる、船は見えず) ……眞實にて無事に戻つて下ればよかばつてん。

や、長い間たつ。

背後の上手にがやん／＼人聲が聞える。直先に青年會の旗を持った老人が歩み、戸板にのせた死骸が三ツ、子供や老人に荷はれて靜かに通り行く、其家族らしい女達は、あとから大聲あてげ、泣き乍らつゞく。

伯父は瞬もせず見送る。

沖は稲光して、海を晝の如く輝らす。上手より笑聲聞えて来る。

勢れきつた漁夫四人、大勢の老人や子供に取りまかれ出て來り、足を止め。

漁夫の甲 (家の中を覗き、伯父を見つけて) 父つあん、ひさか目に逢來た。

伯父 おゝ、次郎さんの。

漁夫の乙 ようやく生命拾ひして歸へつたさばの。

伯父 無事で結構つた、俺が弟は一緒じゃなかつたさかい。

漁夫の甲 出て行く時きや一緒じゃつた、元島沖の瀬で船が打ち破れ、乗組の俺達も何も  
かんも散々々々、浪に浚れて皆行衛が知れんものう。

伯父 (不安に) 船が破れたさかい。

漁夫の乙 此家の船が破れたさじやあかの。

伯父 (悲痛な聲) ウ、ン。

漁夫の乙 ミりかへしのつかん災難じやつた。

伯父 (蒼白な顔色に變じ) 困つたな。

漁夫の甲 又、あきて来るけん、其時委細か話ばする、一度歸へつて来る。

伯父 ……。

一同、無事を説す歎聲の中に下手に入る。

伯父 (獨白) 大切か一隻の船が破れてしもうたら、弟の谷藏が生きまつても……、是から  
ささやこうして喰ふて行くじやろか……。

上手より走り來た妻は、髪を振り亂して家に飛びあがり、狂氣したるが如く、小刀を取り上  
げ髪を根本より切り放ち、神棚の下に額づく。

妻 金比羅さま！。妾が此通黒髪は切つたけんで、さうぞ夫の生命を助け下れまつせ、何  
卒無事で御座いますごこ。龍宮さま、妾の壽命が縮まつてもよかけん、夫は助けて下れ  
まつせ。



伯父、呆然として眼を見張る。

妻は切り取った髪の毛を握つて、上手へ走せ去らうとする時、裏道に娘出で来り、妻に取纏るのを引側し、再び走せて行く。

間もなく娘外より。

娘 (涙聲にて) 伯父さん、お母は氣の相違つてしまつたばの、村中の人達がごめても聞かずに濱ば走つて歩く。

伯父 嗚呼、俺の足が丈夫たらこぎやん役にたつこばつてん。

娘 如何しゆう！。如何したらよかじやらうか？。

伯父 ……。

沖に一隻の漁船現れ、灯近づき、まもなく消える。

娘力なく無言にて、上手の方く泣き乍ら行く。

下手より村役場の人、役場のアラ提灯を手にして、外より家の中を覗き。

村役場の人 未だ谷藏は分明らんまのう。

伯父 (失心しやうに) わからんまにて御座りますばい。

村役場の人 (獨白) 助からんじやらうか？。

伯父 谷藏が早やう歸つて來にや、俺達が路途に立たじやならんけん。

村役場の人 (慰めて) 死人も大分有つたけれごも、こゝの谷藏さんはきつこ歸へつて來るごたる氣のする。

伯父 先刻此處ん前ば通つた様、死骸て戻つて來たつちや何んもならんまじやかなもし。

村役場の人 ……船はさうじやつたか？。

伯父 船も何も浪におつこられたごたる……。

村役場の人 氣の毒つか。……村長さまに頼んだつちや、役場に救済資金いふもんな  
一厘もありやせんもん氣の毒つかのう。

伯父 (泣いて居る)……。

村役場の人 私も濱に行つて来る。……氣は落さずにシツカリして居らんさいかんばい。

村役場の人、上手へ去る。

伯父、ぼんやりして長い間がたつ。

娘、家に馳け上り来て。

娘 伯父さん、お父が助け船から助けられて来たさばの……。

伯父 (泣いて欣び) 生命に別状なかか？。

娘 (萎れて) 皆で、お父の名前は呼んごつこばつてん、返事はせん。

伯父 (蒼白な顔に震ひを帯びて、手を合せ神棚を拜し) 金比羅さま、たつた一人の正直な  
弟の生命ば助けて下れまつせ、御願ひで御座ります……弟の女房が、髪は切つて海に投  
け込めば金比羅さまが生命は返して下れなはるけん、髪は切つて狂人のごさうなつこり  
ます……。さうぞ俺に悪かごころが有んなら詐して下れまつせ。俺の生命は今すぐでん  
差上げて、弟に代へて……嗚呼、お願ひで御座ります。

上手より大勢が谷藏のをせ、老人や子供が擔ぎ家に入れる。

妻は眼を吊りあげて、狂人の如くつきそひ身體をガタ／＼震るはせて居る。すぐ後から、村  
の女に案内されて、醫者が急ぎ來り、脈を取り乍ら。

醫者 (漸くの後) 大分、海潮は飲んごらす。

妻 (心配な顔にて氣づかいつゝ) 生命は助かいますか?。

醫者 大丈夫と思ふが。

いろ／＼手當をして水を吐かせる。大勢の村人は、外の方に隨もなくガヤ／＼言つて群れて居る。

醫者 (背後を振り返へり) 靜にせんか?、今が一番大切な時ぞ。

村人、靜まる。

谷藏、呻く。

妻 あゝ、……しつかりして下れんのう妻ばの妻ばの。

娘 お父／＼。

伯父 (神棚を拜して) 難有存じます、さうぞ谷藏がたつしやになるをこしして、身體ばかり

して下れまつせ。

醫者 大丈夫……。

娘 お父／＼。

大勢の村人 あゝ、谷藏さんが生きあがつた……。

醫者 (大勢の方に) しつ／＼しづかに……。

谷藏、半身を起し、家中を見まはして。

夫 俺が家か?。

妻 (欣しい涙をたゝへて) 妾達……。みんな村人達もこぎやんして心配して來さらすこばの。

夫 (うつゝの如く) 船は無事か?。

妻 まだようわからん。

醫者 静かにしてをかにやいかねぞ。

夫 (元の様に伏して、獨白) 俺の生命は助かつてん、船が助からにや、俺等の暮らしが出来るもんか。あ、何んこいふ不幸もんに生れたもんじやらうか。

村の老人甲、下手より急いで來り、大勢を押し退けて。

村の老人甲 (急いで) 先生様早う來て下れまつせ、俺の家の息子が苦しんで死んどたいけん。

醫者 (村の老人甲に) 此家の人はもう安心のでけんスグ來る。(妻に) 後が大事ぞ、二三日静かに寝かせよかにやつまらん。

妻 (頷く)……。

醫者 心配ごは聞かせんや……。

妻 へえ。

醫者 俺もなか／＼忙しか。(立上る)

妻 難有にあなた。(娘に) お前もよう御辭儀ばせんか。

伯父 いづれ後で、禮にや誰かば出しますけん、是で失禮します。

醫者 御互ひに村の人の爲めに盡すこのけん、そぎやん改まらんじやつたつちや……。

村の老人甲 (ハラ／＼し乍ら) 早やう來て下れまつせ、先生様。

醫者 すぐ行くけんぞ。

伯父 ありがたう御座いました。

醫者 あまが大事だからな。

妻 ありがたう存じます。

皆が丁寧に禮をしてゐるなを醫者と老人急ぎ去る。

見物して居た村の人達はポツ／＼歸つて行く、がまだ半分の人數が残つて居る。

夫 俺が財産の一隻の漁船が打ち破れて居るごたつて仕方んなか、さぎやんしたらよかじやらうか？。

妻、伯父泣く。

娘 お父、先刻、助かつた人達から聞いたばの、お父の船は瀬で打ち破れたまけな。

夫 (吃驚する)……。

伯父も妻も泣く。

夫 あ、……。

娘 妾がお父に頼んのあつこ。

妻 こぎやん騒動の中で……。

娘 今頼んで、お父は安心させてやらねばつまらん……。

夫 ……。

娘 妾は藝者にして下れまつせ、十年でん二十年でん……一生でんよかけんで。

妻、たまらず泣き崩れる。

娘 妾が藝者に賣られて、いくらでん金ばやらにやならんと思つてゐるけん、而して其金で何か仕事は見つけて下れまつせ。

夫 (悲痛な叫び)あい。

娘 (母に伯父に向ひ)勘忍しまつせ、お父や伯父さんも今日迄妾が藝者になる事は許さん

じやつた、そらばつてん是から金の入用事になつて来たもんば、さうぞ藝者になしまつせ。

谷藏、我が娘の顔をチツと見詰め、湧いて来る涙を手でふく。

村の人達は感心して大聲に。

村人の甲 感心な娘じやらうか。

村人の乙 孝行娘。

村の人丙 谷藏さんはよか娘ば、持つて不幸中の仕合せだの。

村の人甲 そぎやん心がけのよか娘は、きつこ出世するばい。

村の人丁 俺の眼からも涙ん出て来た。

皆、稱讃の聲を放つて、果てはシタ／＼泣き出す。

伯父 俺もう何んも言はぬぞ。(娘に)お前に此の通り手は合すつ。(手を合せ拜む)

妻 (涙聲)お前以前から藝者になりたがつて居つた、……そうば今迄きめこつたが、もう、こめん此方から、頼んけん而して妾達一家ば救けて下れろ……。

娘は悲しみの中に希望の色を現して居る。

沖は稲光の中に遠雷聞え、家の中でも、家の外でも泣き聲を惜しますあける。

幕

(大正十二年一月十七日作、同年三月二十二日改作)

島原亂の一挿話

島原亂の一挿話 (二幕)

人

天草 四郎	原城の總大將	十六歲
山田右衛門佐	原城の將	
森 宗意軒	同	
赤星 内膳	同	
駒木根八兵衛	同	
天草 甚衛兵	同	



大矢野作左衛門	同	
栖木 右京	同	
戸嶋 宗衛門	同	
田嶋 刑部	同	
千々輪五郎左衛門	同	二十歳
芦塚忠左衛門	同	三十四五歳
鹿子木 左京		二十五歳
三土九郎兵衛	富岡の武士	四十歳位
立 花	富岡村豪農娘	十九歳
其他	大勢	

所 及 時

第一 島原加津佐村の松原。夕、

寛永十四年の秋。

第二 島原原城二の丸。曉。

寛永十五年正月三日。

第一幕

舞 臺

正面には松の大木。四五本有りて、背後には山又山重り、その奥に温泉嶽高く聳れ、紅葉に彩られて居る。すべて舞臺は、秋色につままれたる景色。

浪人鹿子木左京左手より出で。

鹿子木 (獨白) 私が、此村に足をこめてからもう、二年と言ふ月日がたつてしまつた、中國でも自分を召抱へるから言つて下れた大名もあつたが、其時分の私には主持ちが五月蠅て仕様がなかつた。……あの芦塚氏から再三、お前ご一所に原城に行つて、日本の兵を相手に戦はう、而して自分達の信仰する神々の教へを、此國に擴めて行かうと言つて下れて居るが、その言葉の裏面には大きな野心いふものが有る、山田ごか、森ごか、赤星ごか、いふ革命兒が天草四郎の年少者を煽オウチておいて、旨い汁を吸はうご……私の父が、小西行長殿の家臣だつた關係上からして、子供の時にちやんご洗禮まで受けてはゐるが、教への爲めに血を流して侵略主義を實行しやう等ご極端な事は一寸も考へて居ない。神教の爲めに戦つて勝利者ごなつて迄も、教へを擴める可きものじやない。私は私の主張ごして何處までも平靜に社に仕へて歩き度い。……今の様に悠々ご日を

送つて居る中に、世間の空氣は、素晴らしいものになつて來た、原城に行く人達が、今日は百人、明日は二百人ご噂されて居る、やがては此半島の人々が皆、あの城に這入つてしまふ運命をもつて居るのだらう、だけき又、三代將軍の兵も手ぬるいごこごだ、全て子供の戦争ごつこ見たいだ。アハ、、、、、私も此卷添に巻き込まれないうちに、熊本か薩南かに渡つて、かねて練習して居る鐵砲の術を専門に勉強しやうかしら、まあ―何んごかしなければならぬ時が、眼の前に迫つて來たぞ。

鹿子木、下手の松の根本に、腰うちかけて。しきりに考へにしづむ。大木の松のことゝて鹿子木の姿は舞臺に出て來る者には、松の蔭になつてよくわからない。

三土九郎兵衛、立派な服製にて、立花の手を無理に引張り連れ來る。

三土 もう此處まで引ずつて來た以上は、仕様がないよ、ね、い、だらう。此の間から玉

章を何度やつたと思つてるかい、仲間を持たせてやつた數も随分重つて居るが、一度だつて返事をよこさないとは、あんまりぢや、此の九郎兵衛は飛ぶ鳥落す役目の武士といふ事はよく知つてゐるだらう。私の言ふ事をうんごたつた、一度でも諾けば、家臣の大勢に傳れて御室様だごあがめられるぢやないか。……決して無理は言はないから……。

立花 あなたは随分、卑怯なお方よ、お話しが有るなら有るで、此處まで妾を連れて來ななくてもいゝぢやないの、それも亂暴に、力づくで。あゝ手が痺れてしまつたわ。

三土 そりや氣の毒だつた、許してお下れよ。すなほに來るお前ぢやないものだから、つい亂暴だつたか知れないけれど。玉章にも書いておいた通り、毎日々々お前の事はつかり考へ暮らして居るんだもの、かう手荒な様に見えても、いたつて小心者だからね。此處でかうやつてる事は、誰も知らないんだから、そんなにそわくしなくつてもいゝぢ

やないか。

立花 妾ね、外に用事も有るものですから、是で御暇申しませう。

三土、立花を離さず。

三土 いゝぢやないか？。

立花 いけません。

三土 そんなに、つけく言はなくてもいゝぢやないか？。

立花 お離しなさい！。

三土 今時の娘はなか／＼豪い權幕だね。

立花 あなたはお忙しいお身體ぢや有りませぬか、如何です此島原中の騒ぎつたらないぢや有りませぬか。そんな騒動の中に吞氣らしく……。

三土 そりやあ、の馬鹿々々しい鬼理支丹ミやらの邪教信者が、ワイ／＼して騒いだつて  
これ程の事が出来やうぞ。

立花 その騒ぎは、あなたの様な武士の責任じゃなくて、……………お離しなさい、妾共に悪  
巫山戯してる間に、邪教征伐でもお考へになつたら如何でしやう。

三上 つべこべ言つてのがれやうこしつたて放しつこなしさ。

立花 まるであなたは、蟻アリの様ですね。

三土 蟻アリでも、龍リウでもないよ、刀にかけても俺のものにしなれば……………服従させて見  
せるから。

立花 刀にですつて……………ゑゑ、その刀にかけて下さい、思ふ存分斬つて下さい。

立花、三土に武者振りつく。

三土、困つて。

三土 今言つたのは冗談だよ、お前達を嚇す刀じゃあないよ。

立花 じゃ、何故刀にかけてもミ仰言りになりましたの。

三土 なか／＼理窟家の別嬪さんたな。

立花 早く帰して下さい、時間がたつばかりで困りますわ、妾は大きな聲してよ。

三土 アハ、ハ、大きな聲して御覽、街迄は聞ゑつこ無いから。

立花 悔やしい、女ミ侮つて……………。

三土 俺の言ふこゝさへ、うーんミ諾きさへすれば、其でいゝのじゃないか？。

立花 如何しても諾かれません。

三土 如何してもか？。

立花 何度御責になつても駄目です。如何しても嫌です。

三土 うーむ、じやい、ぞ、其代りお前を鬼理支丹の信者と言いふらして召捕へるから。

立花 えつ！。(驚く) そりああんまりです、あんまりです。

泣き居る立花を見て、微笑乍ら。

三土 悪い事は言はないから、此九郎兵衛の言ふ事を諾いてお、きよ。お前が魂理支丹の信者に相違ないと言はれ、ば如何だらう其結果は、…………お前も噂で知つてゐたらう、五日も前の車だつたね、村の末次郎達の家族は…………温泉嶽に連れて行かれて、あの怖ろしい火を噴き出す地獄の中に、投げ込まれてしまつただらう。お前も山入りの罰にされる事は知れきつてゐるだからね。

立花 あなたは人間ですか。

三土 不思議な質問を出したね、勿論、人間さまだ。

立花 妾の様な罪咎も無いものをあんまりです、妾の家の様なのは、村の爲に盡して居る良民と思ひますわ。

三土 そりやさうだらう、二三年前の大饑饉にも、親御はうーんごお金を寄附して下さいたし…………。

立花 ……………。

三土 俺には俺の主義が有るのだ、要するに俺の言ふ事。つまり命令だね、その命令に服従しないものは、片つ端から踏み散らして亡てしまふのだ。お前は俺の言ふ事を諾いてお下れ、ね、俺が頼むんだから、そう六ヶ敷い事でもないぢやないか？。

三土、立花を押し倒さうとする時、鹿子木松の間より出で。

鹿子木 妙な武士が此村には居りますね。

三土 何んだ。汝は何者だ。

鹿子木 何ものでもい、じやありませんか、早やく其女を許しておやりなさい。

立花す早く、三土の手を放れ、松の木にかくれる。

三土 横合からのざばり出て、無禮な事を言ふに承知しないぞ。

鹿子木 私の腰には大刀がありますぞ、あんまり弱い者虐めをするに、此刀が黙つて居りませんからな。

三土 憎つくい言葉、後悔するな。勝負をする前に名を言へ、………名をなならずば邪教一味の者共か？。

鹿子木 まあ、せかれなくつてもい、私は何時でも、弱者の味方をする若者だに記憶

してをいて下れ、ば幸福かも知れません。

三土 何んじや。

三土、大刀を抜き上段に振り冠り、斬りつけんとする、鹿子木も刀を抜いて渡り合ひ、大に戦ふ。

三土、力あまつて大刀を松の木に深く切こむ、鹿子木近づくと同時に、飛鳥の如く三土逃げ去る。

鹿子木 噂ほごにもない弱虫奴！。

立花畏れく出で來り鹿子木の前に跪き一禮する。

鹿子木 御安心なさい、もうこれに懲りて、今の男は再びあんなこゝはしまいに考へます。

立花 只今は大變有難う存じました、厚く御禮申上げます、けれどもあの、しぶとい人の事

ですから、後でどんな難問題を言ひかけるか知れません。

四六

鹿子木 惜い事を致しましたね、跡を追馳けて斬つてしまふこよかつたのでしたのに。  
立花 そんな事になるこ又大變ですわ。

鹿子木 困つた役人があればあるものですね。

農民の甲乙走り來り。

農民甲 先生さま。

鹿子木 顔色を變へて何事ですか？。

農民甲 今んから、藤壽さんの家で、皆の衆が集まつて、天便祝詞ゴラヌサば祈るこイこになつたり  
やす。

農民乙 青塚先生から、是非あなた様に御越しになるごこイう御誘めして來いこの使に、兩

人が來た様な次第で御座りやす。

麗子木 うん、なか／＼盛大で結構じや、しかし私は外に存する旨もあるので、切角の御  
招きにも應じかねる、何卒青塚氏初め、皆さんへよろしく御傳へを願ひます。

農民乙 ばつてん、皆があゝしてあなたの御出でを待つこりやすけん。

鹿子木 御親切はよくわかりきつて居るのですが、私の信仰イこ皆さんの信仰イこの主旨が非  
常に離れて居るものですかね。

農民甲 如何いふ風にじやらうか？。

鹿子木 其は青塚殿がよく承知して居られる筈です。

農民甲 ては是でお暇致しやすけん、眞實に先生の御出のなかイが、残念でたまりやんへ  
ん。

四七

農民甲乙去ると同時に、遠方よりアアアアと群集の大聲が、段々近くになつて来る。はてはサンタ、マルヤを叫んでるのがよく聞へて来る。

農民の大勢、手にく、思ひく、の武器を握りサンタ、マルヤを唱へ乍ら、舞臺を通り過ぎ行く。

すぐ其後に大矢野作左衛門登場、鹿子木と立花を見て。

大矢野 やあ、鹿子木氏！。其處に何して居られるのです？。

鹿子木 今、此娘御が、悪武士の爲めに辱しめられるところをお助けした様な次第です。立花 實に危ないところで御座いました。鹿子様は全く妾の大恩人ですわ。

大矢野 それはいゝ事をなさいました、天國パラダイスの神々の御引合ひでしやう。アーメン、ジュス。

鹿子木 今村の人達が、手にく武器を持つて行つたのは、遂々此村も天草殿に加勢する事になつたのですか？。

大矢野 さうですとも、今の三士九郎兵衛の家臣堀田一之助が、事の起りを種蒔いたので。最も信者の連中が、機會を窺つては居たのですけれど。先刻隣村の藤壽の家で、三四ヶ村の者が集つたのです、而して皆が法悦の欣びに溢れてサンタ、マルヤの曼陀羅を伏拜むて居た時に、バラく土足のまゝ、佛壇に近づくものが、四五人有つたのです、それは捕吏共が、巧に農民の信者に變装して來て居たのです、それに相違い有りません私も伏せて居た顔をあげるに如何です、白佛立像を奪はれたところだつたのです、其上に一之助が驚き叫ぶ信者の中にスツクミ立ち乍ら、邪教の者共よく聞け！、紅毛碧眼毛唐に誑かされ、蠻語を用ひるばかりでなく、邪教を深く信仰し、加持祈禱をする等の



悪心者等、よく此有様を見ておけし叫び乍ら、私達の生命より大切な曼陀羅をズタ／＼に引裂いてしまつたのです。

鹿子木 亂暴な奴だ。

大矢野 御話しにならないのです。さうするに一番前に坐つて居た芹塚氏が、眠を怒らし、て屹／＼睨んだかと思ふに、一之助の首が一刀の下にコロリと轉がつてしまひました。其上幾人がの捕吏も眼の前に屍となつて横たはつてしまつて、聖場も修羅場と變化してしまひました。此時誰言ふもなく、原城への聲が叫ばれました。事此處に到れば當然な事です、而して群衆は道筋の役人の家、寺院、神社等を片つ端から破壊して、原城へ向つて居るにこそです。

再び農民の大勢。サンタ、マルヤを唱へつゝ過ぎ去る。

大矢野 信仰の欣びに満々たる人達が、勇んで通るよ。嗚呼これ等の人達へ幸をあたへ給へ、天上の神々。(神を祈る)……あなたも今、決心して下さい、而して私達に同情して載き度いのです、同じ道を信仰するあなたが、果非私達と共に原城に這入つて下さい、私達は天國の神々の加護の下に、飽迄も正義の鎧をこりましよう。

農民丙、走り来り。

農民丙 もう、手配りがすつかり出来てしまひました、皆があなたさまを待つこりやすけん。

大矢野 旨くいつたな。よし、よし、すぐに來るから。

農民丙 ては一寸でも早やう、來てお下れなんへ。

大矢野 承知してよ。

農民丙急ぎ去る。

五二

大矢野 あなたの入城に就ては、芦塚氏から委細御話しが有りましやう、もうすぐ芦塚氏も來られる筈になつて居ります。では私はお先に失禮いたします……………。

鹿子木 (じつこ考へにふける)……………。

大矢野、下手に去る。

立花、鹿子木ジツト無言にて見送る。

立花 遂々、村中はこんな大騒ぎになつてしまつた。妾の思つて居た様に。其も皆役人の達横暴からだ……………。

鹿子木 ……………。

黙々こ考へに耽りつゞけて居る。

又、ワア〜と農民の聲聞ゆ、近づくに従つてサンタ、マルヤ。サンタ、マルヤを祈る言葉が聞けて來る。

農民大勢勇みつゝ、武器を持ち、サンタ、マルヤを祈りつゝ、鎧旗を押立て現れ去る。

忠左衛門、出で。

芦塚 鹿子木氏、久々振りですね。

鹿子木 やあ！。

芦塚 其處に居られる御婦人は、立花さんご申されるお方では有りませぬか？。

立花 え、太郎佐の娘、立花で御座ります。

芦塚 お氣の毒なごこになりましたね。

五三

立花 (驚いて) ゑ、如何して……。

芦塚 未だ何んにも御存じでは御座りませぬか？、今、村人の話しに依りますと、御両親も、鬼現支丹の疑がかつて、御吟味の爲め先刻召し捕へられなすつたこの事ですが。

立花 (泣き乍ら) 妾の母も父も……。

大に驚愕し狂せんばかりになる。

芦塚 鹿子木氏、私は改めて御願ひが御座ります。

鹿子木 そんな事です？。

芦塚 あなたは私に信仰する神は同じですけれど、お互ひの主義が相違つて居りますので私は飽迄も、四郎時貞殿を助けて、聖者の御世に仕度い望んで居るのです。あなたは其に反して、たゞ静かに信仰の道に這入つてゆかうして居られるのでしやう、けれど、

何時迄も静かにして信仰をつゞける場合には有りませぬ。只今の出来事は大矢野氏から御聞きになつたしてやう。私共善良の民を役人共は全て暴力を以て、虫けらの様に壓迫して行くのです。今の私は無抵抗主義のお人としては有りません、可愛想な農民の爲めに生命を賭して、も戦ひ、保護する必要を痛切に感じて居ります。何卒か此の島原の農民に言ふより、我が國の爲めに正義の戦ひを起す私共の心中を察して下さい、而して、あなたは私と共に、原城の勇士の一人になつて下さる事は出来ませぬか、島原の哀れなる農民一同に代つて、御入城になる事を御願ひ申すのです。

鹿子木 私は今、私の心が迷つて居るのです。

芦塚 あなたが迷つて居られることは最な事です、かねての御説き、不意に起つた私達兄弟の此有様の爲めに……、私が申す事迄も有りませぬが、私達は正教史の一頁に、善

良なる魂をもつて居た事を残してをかなければなりません、よろしいですか、御主の爲めに戦い……弱者の爲めに戦ふ……さういふ言葉を。

鹿子木 (決心して)もう、よくわかりました、今迄の私の考へは自己主義のみでした、よろしい……私は群集の心理さいふものが、よくわかつて参りました、後刻は申しませぬ、只今からすぐ御供致しませう。而して鬼理支丹宗の天下になれる様に、誓つて努力しませう。

芦塚 ……私は感謝にたへません、天國の神々の御引あはせです。

芦塚、地上に跪きコンタスを手にして、神を祈る。

立花 御尋ねしたいことが御座ります。

芦塚 何なりさも。

立花 妾の父も母も鬼理支丹の嫌疑で捕はれたのですから、もう生命は無い事と思はれます。

芦塚 ……。

立花 妾はそうする一人ものです、姉妹は居りませぬし……。妾は先刻からジツト御話しを承つて居りまして悟ることが御座いました、其上に鹿子木様は妾の大恩人です。こんな女でも原城に入れて下さいますでしやうか？

鹿子木 感心な御心掛けてす、婦人でも老人でも、赤ん坊でもよろしいのです。たゞ私達と同じ主義の人達なら誰でもいい、さういふところじゃありません。戦線に立つ私達に同情して下さい。

立花 じゃあ、妾もすぐ鹿子木様御一所に御供致しますわ。

鹿子木 あなたも入城して下さる……かうなることも神々の御引合せに相違有りますまい、神は私達の上に慈愛の御眼をむけて居られます。

立花 あのおはづかしいので御座りますが、妾は未だ鬼理支丹を信じたことは無いので御座ります、ごんなにして拜み申せばいいのでしやうか？、教へていたゞき度いので御座ります。

鹿子木 この球數コシタスを手にかけて、サンタ、マルヤミ女神の御名を唱へ、思ふことをお祈りすればいいのです。

立花手に球數をかけ。

立花 サンタ、マルヤさま。妾の両親は何も知らない農家の物持ちで御座りました、その両親は、尊い神さまの事を知らないので御座ります。全く知らなかつたので御座ります

それにもかゝはらず、無實の罪で……それも妾の爲めに今度捕へられてしまつたこの事で御座ります、さうか生命を許してやつ下さいませ、其代り、妾の生命を神様の爲めにでも、又は信仰の人の爲めにでも欣んで捧げますから……萬一、父や母が殺されるやうなことになるましたら、天國にやらに呼びよせて下さいませ……神さま、サン、マルヤさま。……両親をば必ず清い神さまの信者になるやうにして下さいませ、御願ひ申上げます。

鹿子木 芦塚氏、立花さんも、私も入城に定まつた以上は、一刻も早く御供致しませう。芦塚 それがいゝてしやう、而してあなたは御得意の鐵砲を受持つて下さい！。

鹿子木 そりや、やります共、先日から考へてをいた鐵砲玉の事も今度こそは、いゝ試みになりませうから。

立花 妾も、男の方に負けないだけの働きをして御覽に入れます。

此時、又、農民の群集、前より大勢来り、口々にサンタ、マルヤを唱へ、武器を携へ勇み過ぎ行く。

芦塚 (背後を振り返へり) 温泉嶽の紅葉の様に、私達兄弟の心は赤く燃え擴がつて居るんだな……………。

鹿子木は、群集を見送つて居る。

立花は、涙乍らに、温泉嶽の父母の事を思ひ出し、泣き乍ら、山を仰ぐ。遠くには、群集の聲、聞けて居る。

—幕—

## 第二幕

舞臺は上段と下段に別れ、石垣見ゆるのみにて、建築物等なく、上段と下段の中央に石段が有つてたゞ上段に、一本の梅の木に、梅花眞白に見ゆ。

曉。未だ朝の光りなく薄暗し。

上段には見張りの農民の兵二人眠むたげに話しをして居る。下段には農民兵五六人、大の字になつて地上に眠つて居る。

農民兵イ 初めて戦争といふものに出て、而して敵と戦つたり、それを見たりするといふ事は眞實に怖ろしか。やつぱり俺達田畑の土をほじくる稼業が一番よか……………此頃急に村が戀しふてたまらん。

農民兵ロ そりや、そうたい。だけき、今更村に歸るこも出來んじやなかなあ、村に歸つても誰も居らん、此御城に來なかつた連中は、何處かの島へても逃げこんだまじやらう。

農民兵イ 一昨日は御まもりのサンタ丸屋、昨日はサンまるぜじミの丸じやつたが、今日はサンゼのひよ丸じたい。

農民兵ロ そうたい、村に居りや、人參や大根、牛蒡の御雜煮を鱈腹つめこんざるじやらう…………。かうやつて城籠をするのは何日迄つゞくのか分らんたい、俺が城に入つてからは未だ何百日もたゝんばつてん。(小聲になり)もう飽きくゝになつたたい。

農民兵イ そりや、お前ばかしじやなかばい、皆の衆が口にくそ出さんけれき、やつぱり飽きくゝの方じやらうと思ふたい、ばつてんか、又、不思議な事にや、あの祈りの時、サンタ、マルヤの御名を唱へるこ、今迄倦怠身體も、引しまつて來るもん。

農民兵ロ そこが信仰の何こやらじやらう。…………が、元日の日には入城する人の大層多かつたたい、天草からもぞろ／＼、船で、押し渡つて來たし、半島の村々からも大分集まつて來るし…………俺達の退屈な思ひも、もう暫しの辛抱かもしれん…………。

農民兵イ きつミ生神様の宣傳が旨くいつたんじやらう、十年程前にポルトガルの宣教師が此國には生き神様が出現して、此國を救つて下れらす言ふたけな、その生き神様が總大將の四郎殿だい、實に神々しい御姿だもの。…………昨日、赤星大將のお話しては、長崎の外海の島々からも大勢の人数が、入城の手筈に運ばれて居るげな…………其上に、運よく運べば黒船の加勢もあるげなだい、それを聞いた人達は大に喜んで居つぞ。

農民兵ロ 早やうそがん事になつて下されりやよかが。(空の眞上を仰いで、指し乍ら)まだあの彗星が、長い／＼尻尾を引いて、此御城の上に現れて居るだい。

農民兵イ 眞實に妙な星だ。……あの星が最初に現れてから、かれこれ半歳近くになる。……是から何日迄もズット消えずに光るのかしらん。

農民兵ロ あの星の事だ、昔からいろんな事ば言はれる。國難の有る時にきつこ出るのだけな、元寇の戦争、朝鮮征伐、等の時にもあの星が出て居たそうじゃ。何でも、同じ形ちて無く、いろんな形の有るのじゃけな、二三年前、長崎で黒船騒動があつた時も、細長い眞赤な一本の糸を引いてるたこいふことだ。

農民兵イ 今度戦争にも出るこはあたりまへの事つたい、日本國を鬼理支丹宗門の國にするか、それこも、鬼理支丹の俺達が、滅亡してしまうかの大問題のけんて。

農民兵イ、ロ、は、シキリに空を見上げて話して居たが遂々眠りこけてしまふ。

立花、周圍に氣をつけ乍ら出て来る。

立花 妾淋しくつて淋しくつて仕方がない、快活な妾が、如何してこんなに淋しいんだらう……左京殿が九郎兵衛奴をまかせられた、あの御勇ましい時の事が妾の胸に深く、怪しく刻みこまれたのであつたけれ……たゞ、武骨一遍の武士、妾の思ひを玉章に書いてあけても返事一つ下さらないし、又先きの日の戦いに負傷された時にもかいがいしく看護しても、固苦しい仕打ちばかり……あの人には戀愛こいふ事は分らないのかしら、青春の血こいふものは無いのかしら……それこも、戦ひにはつかり氣を取られて居られるのかしら……女心、それも妾の様に弱々しい處女、處女には戀の慰安が何よりも必要なことだらう。こ言つて他の女の方の事は分らないけれ、妾にだけは強い男の方が欲しくてたまらないわ。殊に、こんな淋しいお城の中では尙更の事。何時、矢や鐵砲の玉にあたつて死んでしまふか明日の生命もわかるものじゃない。……此の



様な苦しみを、性の悩みみいふのかしら……富の力でも、宗教の力でも、此淋しい魂を何處迄、慰めて下れる事が出来よう。此城内の武士達は、揃ひも揃つて變人の武者者ばかりじゃ、……妾は随分此問題に就いて、考へさせられた。最後には一日も早く此城を抜け出そうかと思ひ詰めたけれど嚴重な見張りが居るのでそれも出来ないし。……其時分、妾の胸を高鳴した事柄が起つた。

此時、梅の幹に矢がさよる。

立花、ハットして振り返へり、農兵の眠れるを覗いて上段に上り、其矢を手早やく取りあげ、矢文を開かうとする時、遠くより大砲の音聞はて来る。

立花、矢文を懐中し、急ぎ去る。

大鼓、鐘、法螺貝鳴り響き。寂寞の空氣を破る。

鐘をつけた芦塚、走り來り。

芦塚 (大聲に) 者共！。眠つて居るは何事じゃ。

農民の、狼狽し乍ら起きる。下手より大勢の農民の兵出で來り、戦闘の準備にかよる。舞臺、少しづつ明るくなる。

芦塚、大きな遠眼鏡を手にして、のぞき乍ら上段に突立ち。

芦塚 見えるぞ……敵の主力は、此一戦に原城を葬らんこの勢ひで、抑寄せて來るぞ。……旗、指し物の數も澤山なものだ……ようし、我々も大に戦つて、敵に一泡ふかせて呉れやう。(農民の兵達に向ひ) 死力を盡して今度こそは、攻めるのだらうからよく防がにやならぬぞ。いゝか。敵は今迄、寄せば打破れくしたのだから、……誰か三の丸に馳けて行つて、敵の總軍が寄せて來た事を告げて來て下れ。

農民兵のハ はあく。

六八

農民兵のハ、走り去る。

芦塚 今日にはサンゼのひよ丸じや、皆ごにも神々さまを祈らうぞ。

芦塚、珠數を手にし、農民の兵一同、地上に跪き一心に神を祈る。

芦塚 (大聲にて) デウス、バーテル、ヒリオ、スベリトサント、三つのベルソナ、一つのス、タンシヨの御力を以て始め奉る。我等がデウス聖十字架の御印を以て、我等が敵を亡し給へや、デウス、バーテル、ヒリオ、スベリトサントの御名を以て頼み奉る、アメンゾウス。

農民の大勢 アメンゾウス。

太鼓、鐘、法螺貝鳴り渡り。関の聲近く聞は、無数の矢、鐵砲の彈飛んで来る。

農民兵の一同、受持ちの場所につき、或は矢、或は鐵砲を以て應戦す。戦ひ乍らサンタ、マルヤを叫び乍ら。

舞臺一面、鐵砲の烟りにて、濛々と覆はる。

芦塚 油断するな、石垣を昇つて来る一隊があるぞ。三の丸に走り行き千々輪氏に御加勢を頼め！。足の早い者が飛んで行け……。

一人の農民兵、飛ぶ様に、走り去る。まもなく千々輪五郎左衛門を先頭に、三の丸兵大勢来る。上手の端の方に敵軍の武士、五六人石垣を登り、飛びこみ來り激しく戦ひ。敵、味方に死傷者出來、メタメタと斃れる。

敵兵襲殺される。下手からは一隊が、大石、材木を運び來り、敵兵の登つて來た石垣の下に向つて投げ初める。

六九

千々輪 愉快じゃ、愉快じゃ。戦争らしい戦争は、今日が始めてじゃ。敵の奴、業を煮やして、ひつこく寄せて来るアハ、、、。

千々輪、芦塚等、槍を以つて下に向つて何度も突く。

芦塚 (千々輪を一寸見て) まるで芋ざしじゃ。

千々輪 うゝん、愉快だ。

芦塚 さしもの敵も、あゝにつゞいて来るやつは絶えてしまつた。

千々輪 もう少し、登つて呉れ、ばい、のに、まだ手がムズ／＼して仕様がな。

千々輪、石垣に足をかけて、向ふの下を見詰めて居る、芦塚、遠眼鏡にて眺め乍ら。

芦塚 流石の敵も、手を焼いたミ見えて、まるで潮を引くやうに、退却し初めたよ。

千々輪 最少し手ごたへがあつてはしかつたね。

芦塚 今の戦ひでは、千々輪氏のおかげで勝利になりましたよ。

農民の兵は傷いて居る味方を勞り、繻帶等してやつたり。敵兵の首を切り落して、梅の木にその首の髪にて、吊して曝したりして居る。

老人や、婦人、小供が麥飯の握り飯を選びそして、死傷者を抱へ去る。

芦塚 さあー未だ戦も終つたのじやないが、今の間にお腹をふくらせてをいて呉れ。

芦塚、千々輪を初め一同、握り飯を喰べ初める。

空は朝らしくなつて来る。

大砲の破裂するのが聞ゆる。

千々輪 敵は懲りずミ、再び押し寄せて来るのか。何程大砲を打つても、こちらの櫓は藁ぶきだからね。

一同立上り、再び戦闘準備に忙しくなる。

芦塚、遠眼鏡を手にして。

芦塚 今度こそは死もの狂いて押し寄せて来たぞ。大變な數じゃ、十萬、もつこあるかなあ、十五萬か？。城門に肉迫してる奴が居るぞ……たしかに鍋島の紋所じゃ、あれは鍋島甲斐守に相違いない、つゞくぞく。まるで蟻の行列だよ。

千々輪 立派な鎧の武者が馬を走しらせて来るやうだ、誰だらう？。

芦塚 何處だ遠眼鏡もなくてよく見える眼だね、……あ、あ見えた、(遠眼鏡にて熱心に見乍ら)變だぞ、なか／＼立派な大將らしい。……啄木の鎧の上に、獸形の龍頭の兜。……馬を横手に輪乗り掛けて進むぞ、すぐその背後から、水色の具足に金の唐冠の兜を戴き一騎馳けつけて来る、……誰だらう。大勢の士卒が啄の木鎧の奴をこさめやう

こして居る。

千々輪 あの馬は、何んだらう。

芦塚 待て／＼、馬はなか／＼の逸物、前短く後高き青の唐馬らしいぞ。

千々輪 青の唐馬、……それこそ敵の總大將、板倉内膳正の愛馬に相違あるまい。

芦塚 内膳正かしら……あまり軽々しい事じゃが。

田島刑部、馳けつける

田嶋 眞先に進む大將は、板倉内膳正なる由、赤星殿よりの御話しじゃ。

千々輪 愈々内膳正に定まれば面白い。今より此千々輪が討つて出て、彼奴を捕虜にして呉れやう。

芦塚 今切戸を開くさいふ事は、考へものだ。

田嶋 千々輪氏、暫らく待つて居られるがい。

千々輪 俺の身體中の血さいふ血が、大熱湯の様に熱くなつて来たぞ。

芦塚 誰か鹿子木を呼んで来てくれ。

一人の農兵走り入る。

田嶋 總大將自身、城近くに攻めて来たのは、よくくの事だらう。

芦塚 連日の敗戦に面目がないので、じれて居るのだらう。

千々輪 彼奴を生き乍ら、引捕へたいものだ。

芦塚 早やく鹿子木が来てれ、ばい、が。

田嶋 鹿子木の鐵砲で旨く射止めて下れるミ、大萬歳だが。

芦塚 早やく来て下れそうなものじゃ、………何してるのかしら。

田嶋 一走り走つて呼んで来やう、大事な場合じやから。

千々輪 来た、来た、オーイ早やく馳けて来て下れ。

鹿子木 左京、重そうな鐵砲を抱え、上段に馳けあがる。

立花 出て来り、隅の方から眺めて居る。

一同の視線は鹿子木に集る。

芦塚 啄木の鎧着したるものこそ、總大將の内膳正じや、左京氏の實力有らば、今こそ彼を打ち斃して貰ひたい。相手は萬騎一騎の強者だぞ。

鹿子木 よし、左京がたゞ一發の下に生命を奪つてやらう。

鹿子木、十刃玉に強薬をなし、狙ひを定むる。

城外には鬨の聲、嵐の如く起きて来る。

城内はサンタ、マルヤを祈る聲、怒濤の如く、物凄き程の叫喚。

芦塚、遠眼鏡を手より放さず、其他の將も兵もサンタ、マルヤを唱へつゝ、鐵砲の彈矢の來る中に片唾をのむ。

ダウン。……鐵砲を打ち放す。

芦塚 倒したぞ、倒したぞ。

芦塚の聲に、一同狂せんばかりとなり、上段より城外を覗く。

立花、沈んだ顔付となり、顔を曇らせる。

芦塚 板倉内膳正は、馬上より眞逆さまに落ちたぞ。あの敵軍の狼狽は如何だ。……今こそ千々輪氏斬り入られては。

千々輪 誰か、馬牽け。

農民兵、馬牽き來る。

千々輪 ユラリと馬に跨り。

千々輪 今から花々しい戦ひをするぞ、嬉しくてたまらない。……此刀の折れるまで、馬の足のつゞく限り、斬つて斬つて屍の山を作つて見様。……三の丸の兵は俺につゞけ。

千々輪、と三の丸の農民兵、勇みつゝ上手に走り去る。

未だ、矢や、鐵砲の彈が時々破裂して居る、梅の木には矢が二十本ばかりあたつて、激戦の後を語つて居るやうに見え、梅花の多くは散りうせて居る。

鹿子木は鐵砲を手にして微笑んで居る。

芦塚 今の働きは鹿子木氏が第一じゃ、改めて私より此武勳をお喜び申しませう。

鹿子木 何んのこれしきの事、然し僥倖な事でした。此鐵砲はボルトガルより輸入のもの

で今日の戦功も全く此鐵砲の力です。

一同のもの雀躍しつゝ。

大勢 鹿子木殿、萬歳、萬歳。

田嶋 さあ此の、戦捷を天草殿に申上げに参りませう。

芦塚 もう敵軍は大丈夫でしやうかしら、一同是より總大將に報告に行きまして、此の機會に敵軍を追拂ふ協議を致しませう。

田嶋 それがいゝ、てしやう、ては参りませう。

大勢去る。たゞ立花、鹿子木、そのまゝ残つて居る。

鹿子木 (獨白)先刻の戦ひで、打ち放した鐵砲の玉が、内膳正を斃した時には、實に心の奥底から、愉快だつた、自分は今迄、こんな氣持ちのいゝ事はなかつたよ。……………世の

中さいふ不思議な國に夢のやうに住んで居る私達の眼の前に、チラつくものはあの意地の悪い慘酷な役人さ、高慢な富豪共だ、自分は鬼理支丹の教義が擴まつてゆくさいふ事は悪い氣持ちはしないんだけど、其より今度の戦争の結果が勝利になれば、あの剛慢な役人や、富豪も滅亡してしまつて、私達が天下を治める事さなるのだ、私達の天下さなつたら、何を一番初めに實行しやうかしら。……………貧しき者を助ける仕事、慈善事業かね。先づ租税をうーんさ安くしてしまをう、庫の中に納つて居る寶物は平等に分配してやる……………其時が早く來ればいゝな、そんなに愉快だらう、愉快だらう……………不平家の集合して居る此の城の五萬の人達が、そんなに手を取り合つて欣び、涙にむせぶかを思ふさ全く嬉しくつてたまらない。……………立花殿、あなたは私の戦功を、見て居て下さつたのですか？。

立花、不愉快な顔をして。

八〇

立花 え、さうでした。

鹿子木 何卒か私の戦功を褒めてやつて下さい、今の私は誰からでも稱讃の言葉をあびせられたくつて仕様がなのです、私は大成功者です、……あなたの御玉章の返事も今日こそはしたいのです。私の眼に寫るもの、私の心に思ふもの、何物をも幸福になつて來たのです。

立花 あなたの先刻の御働きは、妾達に取りまして、御禮申上げねばならぬ事に相違ひ有りませぬ。けれど、妾が正直に申上げれば、御手紙の御返事を待つて居た時分には、妾はそんなに苛々した日を送つたかを考へて下さい。

鹿子木 ……………。

立花 妾はキツバリ申上げますわ、……只今、妾の心を支配して居るものは、あなたの事てなくつてよ。

鹿子木 (意外にいふ顔付にて) さうですか。私は入城する前は無抵抗者でしたが、此頃の私は強くなつてしまひました、嗚呼、何事も強くなりました。その私が今の成功者になつてから、誰でもを私に引つけたくなつてしまつたのです。

立花 妾があなたを戀したといふ、その頃の事は申上げますまい。……妾は詔ふ事が大嫌いです、今の妾の心には取り返へしのつかぬ或る堅い決心が出來てしまつてるのですもの……。妾からあなたに、戀の私語をしたのには、相違ありませぬけれど、成功者のあなたに如何いふ評判が立ちまするに、妾がまるで追従者になりますから、それが嫌なのです。……あなたを偉大なる英雄として、敬意を表してをきますわ。……

八一



其高い場所に妾もあがつてい、事。

八二

鹿子木、不愉快な顔くをもらせる。

鹿子木 何をするのです。

立花 未だ城外で戦つてるのでしやうから、戦争ごいふものを見度いのですわ。

鹿子木 玉や矢がこんなに飛んで來てるじや有りませぬか、危いからおよしなさい。

立花 い、わ…………。

立花、石段をあらんとする時、袂より矢文を落し、氣づかすに向ふ端に立つて、遠方を眺めて居る。

鹿子木、急ぎ矢文を拾ひ、読みあげ。

鹿子木 (獨白) ウーム、此女奴は非道い奴だぞ、此文面に依るこ、敵軍こ内通して居るん

だな、裏切者奴。…………此手紙を書いた奴はたゞ八三署名して有る、誰だらう、憎い奴だ…………(立花に)これは何ですか？。

立花、鹿子木の手にせる矢文を見て、蒼白となる。

鹿子木 あなたは、そんな優しい顔の所有者にも似ず、實に怖ろしい鬼の様な人間ですわ。此の事を私が、城中の人達に告げたらごんなになるかは、分りきつて居らつしやるてしやう、さあ、私の先刻言つた事を、最一度考へ直して返事をして下さい。

立花 ……………もう、何もかもその矢文で發覺するのなら、妾は此處であなたに殺されても仕方有りませんわ。

鹿子木 私が之を證據に、すぐあなたを捕へるこ言ふのじや有りません、あなたの生命を救つてあげ度いのです、私の願ひを諾いて下さい、而すればあなたも私も幸福じや有り

八三

ませんか？。

八四

立花 (獨白) 妾は一眼でもい、から、戀しいあの方に一目でも逢つて死に度い。

鹿子木 さあ如何でしやう。

立花 では考へて見る餘裕を、興へて下さいますか？。

鹿子木 長くは困りますが一時の間ならお待ち致しましやう！。

立花 有難存じます。

鹿子木 じゃあ、い、御返事を待つて居りますよ。

田島、来る。

鹿子木、手紙を手早く懷中に納める。

田島 總大將天草四郎殿が、戦跡を御見物に御出になりますぞ、鹿子木氏もい、ミこころに

居られて結構じゃ、定めし莫大な御思賞に預かられる事だらう。

鹿子木 此處で御待ちする事にしやう。

田島、鹿子木、立花石段の下に跪く。

朝日さし、青空見ゆ。

大勢の聲起り、サンタ、マルヤ。サンタ、マルヤと聞えて来る。

胸木根八兵衛、天草甚兵衛、大矢野作兵衛門、栖木右京、戸島宗衛門、其他、皆々木綿の組服や鎧等を着し出で来り、右左りの下段に居並び平伏する。而して口々に絶へずサンタ、マルヤを唱へて居る。

や、運れて天草四郎時貞出で来る。

静寂となる。

八五

四郎時貞は美少年にして、漆の如き髪を肩に垂れ、黒木綿の筒袖の上より金唐皮の陣羽織を着し、白無地の袴をつけ、赤銅の大刀を腰に吊す。胸には銀の球數輝き。そのさきに十字架の金色を放つ。

森宗意軒、赤星内膳、山田右衛門佐、四郎につゞき、一人の旗手の手には白地に黒色の十字架の旗を翻し乍ら捧げ来る。

天草四郎、静かに石段をのぼる。

立花、手早く短刀を抜き、四郎を刺さんど石段に近づく、田島馳けより一刀にて立花の肩を斬る。

人々大に驚愕する中に、四郎平然として、倒れたる立花を見下す。

田島 何故、大將を斬らんとするのか？。

立花 ……………。

山田 勿體なくも生神さまを覗ふなんて、太い女だ。

芦塚 一體如何したんだ。

立花 もう何もかも申上げてしまひまじやう、皆様の御承知の如く、妾を救つて下さいました左京様と共に、此原城に這入つたので御座いましたけれども、怪しくも要求する或るものが、左京様に依つて聞き入れて下さらなかつたので御座りました、而して此城に何日迄居ても、無味な暮らしをせねばならぬ事が、嫌になつてしまつたのです、其時分に寄手の軍に山口八郎殿の居られる事を知りました。八郎殿は三年前、父の病氣保養の爲め、佐賀の古湯の湯治場で知己になつた若者のお方です。つれなくされる在京殿よりあの強弓の噂の高い八郎殿に、妾の心は何時の間にか、移つて行きましたのです。

田島 そんな戀語りなんきは、如何でもいい、んだ。何故生神様の大將を討たんこしたのか？。

立花 左京殿は今日、妙な事を御話しになりましたが、今の妾には、八郎殿の事のみが胸に描かれて有るので御座ります、今日の寄手の敗亡はたしかに、板倉内膳正を斃した左京殿の鐵砲の爲め、……それで妾の愛しい八郎殿を再び逢ふ事が出来ぬ様な氣になりましたのです、其上、此城を抜け出す事も出来ず、一履、大將の首をあげて八郎殿を欣ばせてやらうと決心した譯で御座ります。

山田 大膽な奴も有るものだ。

田島 うぬ、よくもく、そんな口が利けたもんだ。憎つくき反叛者奴！。

田島、飛びかゝて立花の首を刎る。

鹿子木、悲歎の面色に變じ、一同は憤怒の顔にて立花の屍を覗む。

四郎はシット城外を見下して居る。

遠くよりサンダ、マルヤを祈る聲、高々と聞えて来る。

——(幕)——

大正十一年十一月作……大正十二年七月改作

曲戲  
女優の睨みと女優の涙

曲戯 **女優の睨みと女優の涙**

人

松本 丈一	青年紳士	二十六七歳
岬 潮路	日本劇場の女優	三十才位
堺 千代子	紅鳥座の女優	二十三四

時及場所

成年の春、本郷座の廊下。

舞臺

正面には複数の板戸をしめきつてあるのみ。

九二

二人の男衆が、大きな花輪をかへて上手より下手に入る、その少し後からも一人の男衆が板札を持って行く、板札にはステーツ研究会より堺千代子嬢へと、墨黒々と書いてある。

正面の板戸が開いて、丈一が出て来る。袂から巻煙草を取り出し、火をつけ吸ひ乍ら廊下をフラムく歩きまわり。

丈一 如何して新劇といふものは、この幕もくも、イラ／＼したやうな事ばかり言ふんだらう、靈魂の叫び、相對的、事大主義、民族自決、戀愛情熱、異性禮讚、深刻、……あんな六ヶ敷い言葉ばかり並べて、まるで新らしい言葉の辭書を開いてるやうだ。……觀客の多くはわかつてゐるのかしら、東京の人間つたら通がりやの、見得坊ばかりじや、馬鹿／＼しい……潮路も此一座のスターに俺の事は知らないんだな(微笑)俺の妾メケして居

た女が、今日のスターだとは知らないんだ。俺に千代子と別れてから、もう二年たつんだが、舞臺のあの女を見て居るよ、又未練が起つて来るよ、俺のかたはらには潮路、舞臺には千代子、俺は女にかけてはいつも幸福で華やかだ、愉快だ／＼。千代子の舞臺を引つこんでしまえば、明石すな子だの、澤野省兵衛だの、藝なんか、如何でもい……千代子に俺の事を潮路が知るよ、大變なやまもちをやくだらう、少しは知らせてもやりたいな。

下手より、臺下に結つた千代子が出て来て。

千代子 あつ あなたは……。

丈一 (廊下で面會するなんて、意外だといふ顔つき)千代ちゃんか。

千代子 (丈一に縋りつき)妾……妾を忘れないで、よく来て下さいましたね、あ、嬉しい

九三

妾をまだ思つて下さるのね。

丈一 今度のお芝居は評判がよくつて幸ひだ、私は自分の事のやうに欣んで居る、身體も此頃は大分肥えたやうだね。

千代子 え。

丈一 姉さんも、お母さんもお達者。

千代子 皆元氣ですよ、昨日は芝居に来て居たのでした、今日も来ればよかつたのに……

丈一 先刻の役なんか、以前より餘程うまくなつて来たね。

千代子 見て下すつたの。

丈一 それを見に来たんだもの。

千代子 ほんまう。

丈一 ほんまだも。

千代子 ハネてから御飯喰べに何處かに行かない、久し振りだから妾が奢つてよ。

丈一 今夜は一寸。

千代子 差支。

丈一 うん、困つたな。

千代子 明晩は……。

丈一 千代ちゃんい、のかい、(親指を見せて)これに。

千代子 知らないわ。

丈一 旦那は俺みたいに、八ヶ敷くないのかい。

背後の板戸すこし、あく。



千代子 いゝのよ、お爺さんだから。

丈一 お爺さんでも、シブいのだらう。負け嫌な千代ちゃんが一所になつてゐる位なもの。  
千代子 ……………。

丈一 骨董品だつて備前の茶壺は十萬圓からするし。

千代子 まあ！。今日は誰か來てるの。

丈一 (一寸當惑して)…………女連れよ。

千代子 誰れ。

背後の板戸前より廣くあく。

丈一 あのう…………日本劇場の、…………岬潮路。

千代子 潮路さん、…………あなたより年上の別嬪ベッピンの、水天女優…………。

丈一 なあに感ちがひされちやあ困るよ、關係なんかないんだよ。

千代子 あなたが…………。

此時、再び背後の板戸が開いて、潮路出て来る。丈一を背後からコツク様にして。

潮路 何してるの、お芝居も見ないでこんな廊下でベチャ／＼話しをしてさ。

丈一 (驚いた顔のま、)…………。

潮路 (千代子を睨んで)大變い、お芝居を見せて下さつて、妾達は驚いて居ますよ、妾を  
お弟子にして下さらない。

千代子 (眼に一ぱい涙をため)…………。

上手へ急いで去る。

舞臺の方からは拍手が聞えて来る。

潮路 女さへ見りや誰にだつて、涎流して欣んで、もう少し男らしくなさいよ、しつかり

なさい。あんな女に丈さまをこられちや第一、妾の顔にかゝつてよ。

丈一 初まつたね、此處は廊下よ。

潮路 何處だつてい、わ、自分こそお芝居も見ないで、妾くやしいく。

丈一 泣いちやいけないよ、大盛装した玉の顔がだいなしになるよ。

潮路 じゃ妾ご芝居を一所に見て居てちやうだい。

丈一 (獨白の様に、而して上手を見詰め) 千代子は可愛想になあ。

潮路 なんてすつて…………。

丈一 いや、なあにも言はないよ。

潮路 さあ、芝居を見ましやう、丈さま新らしい芝居は嫌い。

丈一 大好きだとも…………。

潮路、丈一を無理に引張り板戸の中に入る、板戸荒々しくしめられる。

幕

(大正十二年七月十七日作)

陶物師陳八官

陶物師陳八官(三幕)

人

陳	八	官	陶物師、朝鮮人	三十	歲
甚	左	衛門	庄屋	五十	歲
お	の	ぶ	庄屋の娘	十九	歲
七	之	丞	隣村の庄屋の伴	二十五	歲

其他、陳八官の弟子や無頼漢等大勢

時

元祿時代の、或秋の日、

第一幕 正午過

第二幕 その日の夜

所

肥前の國彼杵郡、現川うづがは

第一幕

舞臺

正面には、陶物を焼く竈、三つ並んで居る、すぐ近くの山には松の中に紅葉が黄ばんだり、赤く染つたりして見え。何處からともなく、河の水の音が聞える。

陳八官の弟子達は大勢で、徳利や、井、皿、茶碗、等の型を作られた品を、大きな板の上に

載せ、それを運んで来たり、竈の中に入れてたりしてやがて竈は密閉される。

まもなく、どの竈にも火が點じられると、今迄忙しさに立働いて居た弟子達は、どや／＼と上、下手に分れて去る。

弟子の内で日本人は日本服、朝鮮人は朝鮮服を着けて居る。

陶物の壊れた破片かけらの間に、弟子二人は残つて松の根を腰かけの様に切つたる根に腰かけ、話を初める、弟子の一は日本人で、弟子の二は朝鮮人で有る。

二人とも、煙管を取出して煙草をのみ乍ら。

弟子の一 お前の飲んぎる、その長なんか朝鮮煙管は吸ひをけの有る如ごとたるのう。

弟子の二 何故です。

弟子の一 煙草は飲むむに、そんけん澤山つめこるもんば。

弟子の二 私達のは、眞實に、此國の人より多いですなあ。

弟子の一 一つ、其れば貸して下れんかい。

弟子の二 いゝこも。

弟子の一 ぢや、俺のば貸してやらう。

二人は煙管を交換して。

弟子の一 なかく強か煙草のう。

弟子の二 此の煙草は甘いもんですね。

弟子の一 お前は此處に來てから、何年になつこかい。

弟子の二 えゝこ、七年前に長崎の高麗町の友達を便つて來たのですから、今年の十二月で、此の現川に來てから滿二年になりますよ。

弟子の一 日本に來てから、たつた七年で、よう日本語に不自由せん如き上手になつたも  
んたい。

弟子の二 そりや、一生懸命に勉強しましたもの、私は早やく此の國に渡りたくつてしや  
うがなかつたのです。

弟子の一 ぎうしてぢやらうか？。

弟子の二 日本が大好きです。

弟子の一 ふゝん、大好きな原因もあつこかい。

弟子の二 そりや、私達の一家は日本こいふ國を言ふ時には、まるで神さまの様な思ひて  
居るのですもの。

弟子の一 變だな、……何か譯の有つぢやらう、お前こ私は此の村に來合せてから、眞

實の兄弟も及ばん位の仲善し、……話しば聞かせんかい。

弟子の二 話しますとも、話す段ぢや有りません、……(考へて)今からざつと、八十四五年前の昔になりますかな、朝鮮國に日本の武者が大勢攻めて來ましたのは。

弟子の一 朝鮮の役の事かい。

弟子の二 さうです、私達は、碧締驛の南の方に有ります、礪石嶺の近くに住んで居た、代々の百姓なのです。

弟子の一 ふん。

弟子の二 村の名は、迎旺村と言ひまして、家も二十軒位の小つほけな處です、丁度、碧締館の大激戦の時、今迄勝ち誇つて居りました李如松さまの軍も、明の援兵抑成龍奴の軍も、あの敏捷すばしこい小早川さまの軍に、散々の大敗北です。

弟子の一 勝ち誇つて居つたといふが、お前達の國の軍は強かつたさかい。

弟子の二 強かつたさかも、小西の軍や、黒田の軍を散々悩ましたのです。

弟子の一 さうかい。

弟子の二 でしたが、碧締館の敗戦は、私達の國をして、再び立つ事が出来なくなつてしまつたのです、その敗け軍の中で、明の武者共は、何も知らないで、逃げ迷つて居る百姓を捕へては、片つ端から首斬つたのです。

弟子の一 そるばつてん、明はお前達の方の加勢ばして居つたさぢやなかかい。

弟子の二 其處です、が明の兵が敗けたさなるさ、本國に歸つてから申譯がないので、朝鮮人の首を持歸つては日本の武者の首ださいふのです、つまり、誤魔化す爲めに、日本人の身代りになつたさ言ふ譯で。私達は、しまひには敵て有る日本人より、味方の明の

武者を見る事を怖れました。

一〇八

弟子の一 如何、慘酷かもんか？

弟子の二 私の祖先は、一家六人。その中には私の父もまだ赤ん坊で居りましたが、柳成龍の一隊に、捕まへられて首斬られやうとする時、小早川さまの兵に、扶けられました、扶けられた許りでなく、凱旋なさりまする時には、此の國に連れられました、祖父が稻の植付が上手なところから、小早川さまの御領内で、養はれて居りました、が父の代になつて、此の長崎に参つたのです。

弟子の一 世の中いふもんは分らんもんだな、敵に愛されたり、敵ば慕うたりするけん。

弟子の二 その御恩からいふものは、日本國を生命の親と思つて居ります、私の父が長崎で、重い病の爲めに死ぬ時でも、小早川隆景さまの御名を言つて、呼吸が絶えてしま

ひました。

弟子の一 私なんぞは、學問の無かけん、何も分らんばつてん、御師匠さまもなか／＼お若いに似合はず、よかお方だ。朝鮮の人は皆、氣の優しうして、善人ばつかしぢや。

弟子の二 かうやつて私達は、日本人ミ仲よく働いて居るので、今では日本人も同じ考へです。

弟子の一 お互ひに、お師匠さまの爲めにや、力ば盡さにやならんたい。

弟子の三、上手より出で来り。

弟子の三 お師匠さまから、此間の焼物の高價ミが全部賣れたけんで、皆にお金ば分配してやらうこの事ばい、さあ、お前達も早やう來て戴いたらよからう。

弟子の一 お師匠さまのお情けは、何時てん深かもんぢや。

一〇九



弟子の二 ほんきに私共を可愛がつて下さる御徳には、涙が流れるやうな。  
弟子の一 ぢや、行かうや。

三人、欣しきうに、上手へ去る。

暫らくして、庄屋の甚左衛門、上手より来る。

竈よりは煙りが出て居る。

甚左衛門 (竈を仰いで) なかく盛んなことぢや……八官ぎのは今、弟子達に、陶物の賣  
上げ代の中から、あゝやつて金を分けてやつて居るが、見上げた若者ぢや、此の甚左衛  
門が見こんで世話して居る丈けの人物だ。八官ぎの、作られた、焼物が初めは評判も思  
はしくなかつたが、此頃ぢや日本中は愚か、異國の人達までが稱讚するんだもの、全く  
あの男は豪い人間ぢや。(見渡して) 竈もかうやつて見渡すに三十六並んで居る、此の三

四年の間に、トシ／＼拍子に竈の数も増えた筈ぢや。

陳八官、朝鮮の粗服を着けて來り。

八官 (甚左衛門に叮嚀に一禮し) 今、一子達を集めて居りましたので、實に失禮致しまし  
た。

甚左衛門 感心々々、自分で利益を取らずに、弟子達に分配してやる等々は、今時の人に  
真似が出来ぬ事ぢや、……又、大きな仕事があるのぢやのう。

八官 お蔭さまで仕事が毎日殖かえて参ります、是こいふのも、あなたさまのお力のお蔭で御  
座ります。誰一人として資金を出してやらうことなさらぬ時に。私に莫大なお金も、此  
の村の土地をお貸し下さいまして、私は死にましても、決してその御恩は忘却致されま  
せぬ。

甚左衛門 何んの、これしきの事、そんなにお禮の言葉を受けては、此方こそ氣の毒だ、お禮は如何でもいゝから仕事に精を出してな。

八官 有難う存じます、私の仕事を成就させて下さいました御禮に思つて、私は一生懸命に、あなたさまのお好きな道の、茶碗を作つて居りますが、幾ら作りましても、思はずしく出来ません。

甚左衛門 そんなに入念なものでなくてもいゝ。

八官 いや、陳八官の大恩人さまに献上致しますものは、心に満たぬものは差上げられませぬ、後世に残す爲め八官の銘を入れてあげやうと思つて居ります。

甚左衛門 さう言へば、お前の銘の入つたものが無いな。

八官 自信の作がないから御座ります。

甚左衛門 そりや、此の土地の土が悪いのだらう。

八官 土はいゝので御座ります、たゞ私の技術が、まだものになつて居りません。

甚左衛門 時に、今日はお前に折入つての注文が有つて來たのだ、引受けて下れまいか？

八官 態々お出にならなくてもいゝのに、……なんなりとも。

甚左衛門 今朝、お代官さまに呼ばれて行くミ、長崎の御奉行さまから、異國の加比丹さまが、近い日に本國へお歸りになるので、其の御贈物として、大井に、あの南蠻船の模様を金で描いた現川焼を贈らうとの御事ぢや。

八官 はい。

甚左衛門 名譽な仕事ぢや、快く引受けて下れ、其れを依頼に、尋ねて來た様な次第だ。

八官 (雀躍しつゝ) 思ひがけない事です、作りますとも、八官の魂を土にも練りあげ

て作つて御覽に入れまじやう。而して何日頃迄に御入用でしやうか？

甚左衛門 今日から二十日間の日限りぢや。

八官 二十日間……ぢや、作りまじやう、確かにお引受け致しました。

甚左衛門 早速引受けて下れて、私も満足ぢや、定めし見事な作品が出来る事だらう。

八官 他の仕事は弟子達に任せて、きつこ相當なものを作りあげなかりやなりません。

甚左衛門 では頼んだよ。

八官 承知いたしましたごも。

甚左衛門 是から瀧の観音様に参詣するので、お暇ご仕様。

八官 まあ、お茶でも一つお召あがり下さいまして……男ばかりの世帯で御座りまするが。

甚左衛門 お茶はい、こして、誰かお前にも女房を見つけてやらにやならぬな（獨白のや

うに）だが、生れが朝鮮人といふので、なか／＼嫁に来てが六ヶ敷い事だ。

上手より、仲間ちゆうげん来り、甚左衛門の前に跪き。

仲間 是から、御参詣になりまするか？

甚左衛門 すぐ行かう、娘は來なかつたか？

仲間 お嬢さまは、お腹が痛いから言つて居られました。

甚左衛門 我儘者の娘の事、仕方がないなアハ、では八官ごの失禮致します。

八官 何時も御無禮ばかり致しました。

甚左衛門を先頭に、八官見送り上手へ去る。

下手より娘おのぶ、籠の蔭より出で来り。

おのぶ (上手を見乍ら) 陳八官さまの男らしいお姿、誰でもが異國人だ、朝鮮人だと言つ

て輕蔑するのですが妾はあんな男らしい方は、今迄に見た事もない、朝鮮人だらうが、赤頭あかがしらだらうが、自分が戀する方が一番愛しいのだもの。……大體、異國人だの、日本人だの言つて、差別する事が妾には如何しても分らない、八官さまは父が資金を出してやられると、此處で陶物を作り初められて、瞬く間にお金も、きれいに返却してしまはれるし、仕事はすんぐ進んで行くし、此處らに住んで居る若い人達より餘程豪い人だわ。妾の理想の夫は、お金持ちでも、身分の高い人でもない、たゞ自分の力で萬年の後迄名を残す完全な仕事をして行くお方よ、ほんごに八官さまはい、お人だ事、……早やく此處にお出でになればいいに。

下手より二人の弟子、竈の火を見に来る、二人は竈の火を見つゝ上手へ去らうとする。

おのぶ お弟子さん。

二人は立留り、やがておのぶに近づく。

弟子の三 よう來なはつたのう。

弟子の四 此間は、私達にもお土産下さいますして、難有存じましたばい。

おのぶ 禮なんて、まあ！お師匠さまはお宅。

弟子の三 (笑つて)へえ居られますばい。

おのぶ さう。

弟子の四 お師匠さまば、お呼びして参りまつしやうか？

おのぶ い、わ、その内、此處にお出でだらうから。

弟子の三 待つて居つたつぢや仕様んなかもん、私が呼んで來まつしやう。

おのぶ (顔を赫らめて)今日はお師匠さまに逢ひに來たんじやなくてよ。

弟子の四 (眼を圓く見張り)へえ!

弟子の三 毎日、逢ひに、雨の日でも、雪の日でも、來なはるこに。  
おのぶ だつて、今日は相違うんだもの。

弟子の三 ぢや、何しにお出だたのう。

おのぶ 竈の火を見に來たのよ。

弟子の四 アハ、ハ、ハ、そんなにお隠しになつても、あなたの美しいお顔に書いて有りま  
すばい。

おのぶ 何がさ。

弟子の四 ほの字これの字。

おのぶ (眞赤になり、顔を袖で蔽ふ。)あれ、い、んてすよ。………人の悪い。

弟子二人、上手へ去つてしまふ。

おのぶ 何處かに隠れてゐて、而して八官さまを脅してあげやう。

眞中の竈の背後の方に行く。

下手よりは、弟子五六人、竈よりあげた出來上つた焼物を、板の上に、澤山並べたのを持つ  
て上手へ遣つて行く。

陳八官、出で來り、周圍を見まはし。

八官 おのぶさのが御出でになつてるこいふので來て見たが、一向姿も見えない、毎日お  
見えになるので、きつミ弟子が私を擲擲<sup>からかう</sup>のでは有るまいか? さあ、今から、御奉行さま  
に差出す紋様でも、考へて見よう……。

上手へ去らうとする時、おのぶ飛んで出て、背後より手を以て眼隠をし。

おのぶ だあれ。

八官 やあ、おのぶさのだ、さあお離し下さい。

おのぶ 昨晚、待ちほけ喰はした罰よ。

八官 よんごころない用向きの爲めに……。

おのぶ お中止なさい、抗辯言つても、駄目よ、妾を心から愛して居ない證據ですもの。

八官 そんな馬鹿な事を、さあ、お離しなさい。

おのぶ いやです、降参てすか？

八官 弟子達が見たら、第一見つこもないぢや有りませんか？

おのぶ ぢや、離しますよ。

を離してから、二人とも木の根に腰かけ。

おのぶ 妾、お轉婆ものだから愛想が盡きて？

八官 勿體ない、私の恩人さまの嬢さまぢや御座いませんか？

おのぶ そんなに、妾を大切に言つて下れるのなら、此間言つたやうに、妾ご夫婦になつておくれなの。

八官 あなたご、あんな仲に、人目を忍んでなつてしまつてるのですもの、そりや私が御願ひしてもご思つて居りましたけれど。

おのぶ そんなら、夫婦になつて下れるご言ふのね。

八官 だが、そんな譯には参りません、……あなたは私を鬨り者にして居られます。

おのぶ (驚いて)如何して妾の火の様な、心がお分りぢやなくて。

八官 分りません、分りませんごも。

おのぶ 今日に限つてそんな言葉を、ひよこつしたら他に……。

八官 私は二人を愛したり、想つたりするやうな事は出来ませんよ、……あなたのように。  
おのぶ 妾が、何時そゝそんな事を。

八官 私は今迄何も知りませんでした、が今朝言ふ今朝、やつと分りました、ご申しあけるより驚いてしまふて居ります。

おのぶ 何をだらう。

八官 白々しい、あなたには許嫁の七之丞さまが居られますつてね。

おのぶ (愕然として)えつ！。

八官 弟子の一人から、その話しを聞きました。私を朝鮮人と思つて、鬨つて居らつしやるに相違有りますまい。

おのぶ まあ！。

八官 私は賤しい弱い國の男です、私はもう此の國に居たく有りません、今日お引受け致しました御奉行さまへの品物、お父上の庄屋さまに差上げます品物を作りました上で、朝鮮に歸つて行きます、私はもう日本が嫌になつてしまひました。

おのぶ 自分の言い草計り言つて、妾の事も考へてお下れでない、妾に許嫁の有る事は、そりや隠して居ましたけれも、八官さまを鬨り者にする爲めでも、又玩具と思つてる爲めでもありません、女の恥かしい何物も獻げて居る事を考へ直して下れ、ば分るぢやないの、許嫁と言つても是は自分から、好き好んでなつた事ではなし、生れ落ちる此の國の習慣として、親親が定める例で、いくら親が定めておいたつて、本人が嫌ならそれ迄ぢや、あの氣障な七之丞は、妾が大嫌ひですもの、あなたの前で、七之丞を

辱かして、妾の縁を立派に切つて見せまじやう。

八官 だつて、此頃の噂さでは、七之丞の親御から、婚禮の日取を早くく急ぎたて、居られるさうぢや有りませんか？

おのぶ 肝腎の妾が承知しないんですからね。

八官 無味<sup>つ</sup>らないく、七之丞さまの様な身分に生れなけりや損だく。

おのぶ ぢや、妾は両親に何もかも打ち明けて、八官ごの夫婦になる事を許して貰ひまじやう。

八官 そりや駄目です、こんな朝鮮人に。

おのぶ 二言目には朝鮮人なんて、そりや僻根性いふものよ。

八官 假にあなたは、私と一緒に下さるにしても、親御さまになれば、七之丞さま

の親御に濟みますまい、駄目ですく。

おのぶ いくら駄目だと言つても、こつちが頭を振れば、其れ迄の話。

八官 私も亦、よく考へて見るに、私の爲めには大恩人のあなたさまの親御に對して申譯有りません……。 (聲を落して) 一層、あなたは七之丞さま早く、晴れて御夫婦になられたがい。

おのぶ 又してもそんな邪見な……。あなた妾が、初めてお眼にかつたのは、今から四年前の、春の末でしたね、母に連れられて瀧の観音さまに躰躑を見に行く途中、此處を通りかゝるに、泥だらけになつて、一生懸命、陶器の型を作つて居られました、今も相違つて、お弟子もなく、たつたあなたお一人で、小さい竈の横で、仕事をして居られました。



八官 あの頃の事を思ひ出すと、自分でも幸運が、あまりに早やく来た様です。

おのぶ さうでは有りませんが、あなたの御努力は大したものでした。妾の好奇心は毎日、あなたが仕事をして居られる事を見に行へ事でした。

八官 (昔を懐かしさうに)あの時分の、あなたはまだ、切髪のお姿で、可愛い娘さんでしたね。

おのぶ 何時でしたか、あなたは、竈の前でシクシク泣ひて居られましたのね。

八官 さうく、私の仕事が目く行かなかつた時でした、毎日々々同じ釉薬や、同じ土を使つても、氣に入つたものが出来なくつて、もう是つ限りで、陶物師を諦め様かしらさ考へたりした頃でした。

おのぶ 其時妾は、こんな事を申しましたね。「小野の道風さいふ人が、柳に蛙の飛びつく

……………」話を。

八官 蛙の話承つてからの私は、何度もの失敗をつゞけ乍ら、淋しい日を暮らして、此頃になつてやつと製作に對する丈けの自信がつかしました。

おのぶ 其の事の有つた三年目でしたね、二人は夜の宮角力歸りに、人混みの中を抜けて……………」

八官 終生忘れる事の出来ない事になつたのは……………」

おのぶ そんな昔の事を、少しは思ひ出して下さい、思ひ出してさへ居て下されは、先刻のやうな變な事は言はれませんわ。

八官 だつて、運命ですもの。

おのぶ 運命と言つて、悪い運命なれば、直に消してしまつたらいいぢや有りませんか？

八官 ……………。

一一八

おのぶ 男らしく、なさいよ。妾は如何しても、あなたより他の男の妻になりませんから。

八官 眞實ですか？

おのぶ 僞は言ひませんよ。

八官、おのぶに近づき、両手を執り。

八官 私は御禮を申し上げます、厚く感謝いたします

おのぶ まあ、そんなに他人行儀な。

二人は手を執り合つて、もう涙を流して欣んで居る。

おのぶ 妾が、きつこ母に願ひして、父上を説いて貰らつた上、天下晴れての夫婦になりましよう。

八官 こんな、貧しい男に。

おのぶ 貧しくつたつて何んだつて、かまふものですか？

八官 私はまるで、夢を見て居るやうだ。

おのぶ では、妾、これから歸りましよう、而して母に願ひしますから。

八官 では…………。

おのぶ 今夜、何時でもお眼にかゝります鎖守の森で、寺の鐘を合圖に待つて居りますよ。

八官 ぢや、其時刻にお眼にかゝりましよう。

おのぶ きつこね。

おのぶ、振り返へり／＼下手に入る、八官は呆然と、背姿を見送つて居る。

一一九

七之丞、怒氣を含んで荒々しく出て来り。

七之丞 やい、陳八官奴！

八官、七之丞の聲に驚き、振り返へり。

八官 何某様で御座りまするか？

七之丞 お前は、俺を知らぬのか？俺様はな、隣村の庄屋の伴七之丞と申すお方ぢや。

八官 あなた様が七之丞さま……………。

七之丞 七之丞の眞實物ぢや、俺の女房と貴さまが姦通して居る事を、昨日知つたぞ。

八官 姦通とは何事です、容易ならぬお言葉です。

七之丞 許嫁のおのぶは、俺の妻だ、何故其の妻と毎夜々々、鎮守の森で密會するか？

八官 許嫁は成程、妻に相違有りますまいが、本人同志が夫婦になつたら其時こそ姦通と

いふ事も言へましやう！

七之丞 ツベコベ言すな、朝鮮人の癖に

八官 ……………。

七之丞 おのぶ奴、いろんな口實を作つて、もう半年待て、もう二ヶ月待てと言いをつて、

俺の處に嫁に来さうもないので、段々取調べて見るに、男が有る。

八官 (蒼白になつて居る)……………。

七之丞 其の男が、人も有らうに朝鮮人の土弄、アハ、ハ、名工だ何んぞと言はれるのを

い、氣になつて、俺の許嫁までも奪うとする太い奴ぢや。陶物より女を作る名工だ。

八官 ……………。

七之丞 さあ、俺の顔を穢したのは如何する。返答をして下れ。

八官 ……………。

一三二

七之丞 返答がなけりや、降参したんぢやなあ。降参した證據しよじに詔證文を書いて下れ。

八官 そんな事出来ません。

七之丞 ぢや、おのぶを横奪りするつもり？

八官 え、おのぶさまは私の妻です、きつこ私が貰ひます。

七之丞 アハ、自惚も程がある、アハ、何んほ物好きの甚左衛門さんだつて、大切な返を如何うしてお前に下れるものかい。

八官 きつこ私が貰らつて見せまじやう。

七之丞 お前は馬鹿だな、アハ、やつぱり朝鮮人は俺達より智恵がないぞアハ。

八官 幾何、お笑ひになつても駄目です、私がつこ、おのぶさまを嫁に貰ひますから。

七之丞 呆れて物が言へない。…………お前は深い譯を知るまい、おのぶを俺より他の者に  
は、やる事は出来ないのだ。

八官 御本人が嫌な男には、嫁入りする譯も有りませんでしやう。

七之丞 よく聞け！俺の親父こゝろに代官さまこゝろは、従兄弟同志の間柄だ、甚左衛門こゝろのが約束  
を背けば最後、俺の父上から、かうくですこゝろに代官さまに申上れば忽ち何かの罰を得て  
庄屋の役はお取上げた。

八官 (驚愕して) えつ！

七之丞 俺の言ひ分は是で終りだが、よくもおのぶを騙しをつて、俺に不愉快な日を過さ  
せたな。

八官 私から仕掛けた事ぢや有りません。

一三三

七之丞 (落ちて居た棒を取りあげ) お前が苦心して居る、此の籠を片つ端から、叩壊してやるから、見ておけ!

七之丞、棒を持つて、中央の籠に進まうとするのを、八官押し止め。

八官 何をするのです。

七之丞 己うぬ!

八官は危く、棒にて打叩れ様とする身を交した、而して、陶物の破片を取つては、七之丞めがけて投げ初める。

八官 もうかうなつては、生命のやりこりだ。さあ来い。

七之丞 何、生意氣な。七之丞は武士だぞ。

七之丞と八官、激しく立廻る。

弟子の一、出て来り。

弟子の一 何奴だ、お師匠さまに亂暴狼藉する奴は。

七之丞 庄屋の伴七之丞ぢや。

弟子の一 庄屋も糞も有るもんか?(上下手に、大聲にて)お師匠さまが危なかぞ、相手は二本棒ばい。

七之丞、棒を捨て、大刀を抜く。

八官、弟子の一、思はず後退りする。

大勢の弟子、上、下手より獲物を持つて出で来れども、七之丞の勇氣に怖れ、たゞ遠まきにする。

七之丞 何奴も、此奴も、束になつてか、つて来い。

誰が、投げたのか、陶物の破片、七之丞の右手に命中する。

七之丞 あつ！

取り落した大刀を拾はんとするのを、一人の弟子、棍棒にて足を拂ふ。

七之丞、地上に倒れ伏すと同時に、皆が折重なり、打擲する。

七之丞、死物狂となり、大刀を手に拾ひあげ、振り廻し乍ら下手に逃げて行く。

八官、跡を追はんとするのを、弟子の一引止め。

弟子の一 相手が悪か〜。

八官 (無念の涙を流しつゝ) かうなつては、彼奴を殺して…………。

弟子の一 そんな喧嘩の種か知らんが、弟子も大勢居るけんて、あきて悠つくり、お話し  
ば伺ひまつしやう、其上で考へも有りますけん。

弟子の二 耐へ難いところを、耐へて下さい、私達の仕事は是からです。

八官 (迷夢より醒めたる様に) うん、私が悪かつた、お前達が言ふやうに、私には大事な  
仕事がある、…………さうだ、私の生命は絶たれても陶物の爲には生きて行かねばならん  
からなあ。

弟子の一 お引留め申した甲斐のありましたばい。

弟子の二 お師匠さまの、其が美點ぢや。

八官 (今迄の争ひは、忘れたる様子で籠の火をヂット見詰め) おい、此の籠に、もう少し  
火を入れて下れ。

弟子達、籠に炭を多く入れる。

籠の煙は益々濃々と立昇る。

八官は、竈の煙を、熱心に見詰めて居る。

弟子の大勢も八官と同じ様に、竈の煙を見詰めて居る。

——(幕)——

## 第二幕

### 舞臺

村外れの寂寞たる場所、黄楸の木が赤い葉をつけ五六本並んで居る、道には薄、野菊、桔梗、女郎花、紫苑等の秋草、美しく繁り、叢の中からは蟲の聲が絶えず聞える。

遠くには山々連り、高く眺められる。

朧月は、舞臺を淡く照らして居る。

二三人の無頼漢上手より竹槍を持って、馳けて來り、何かを私語きて、下手に入る。

七之丞、二人の無頼漢を連れて來り、黄楸の木の背後に隠れる。

蟲の聲は、しきり聞えて、秋の深さの趣きが有る。

八官、靜かに上手より出で來り、中央のあたりに、かゝらんとする時。

七之丞 待て！

八官 (ビツクリして) 誰です。

七之丞 七之丞だ。

八官 えつ！

七之丞 復讐しにやつて來たんだ。覺悟せろ。

八官 ……………。

七之丞、口笛を吹き乍ら陳八官の前に現る。

無頼漢が十人餘、上手、下手、背後より、竹槍、棍棒を手に、八官を取まく。

七之丞 よくも俺を、先刻は辱かしたな。此處に待ち合せて居たんだ、俺に勝負しろ。

八官 私は争ひは好みません。

七之丞 何んだこ、争ひを好まぬものが、何故俺のおのぶを奪はうこして居るか？

八官 私は抗辯いざわらみこられるかも知れませんが、最近までおのぶさまあなたこそが許嫁の仲て有る事を知らなかつたのです。

七之丞 嘘つけ

八官 嘘ぢやありません、神さまに誓つても嘘ぢや有りません。

七之丞 嘘にしても、眞實にしても、俺は黙つて居る譯にはいかんぞ。

八官 そりや仕方のない事です。

七之丞 さあ、男らしく俺に向つて來い。

八官 いや、私は向ひません。

七之丞 卑怯者、先刻は如何だつた、俺を散々擲つたぢやないか、……今度は味方が一人

も居ない上、俺に大勢の加勢が有るので、氣落ちしてるんだらう、……(無頼漢に)一騎

討の戦ひをするから、お前達は手を引いて見ておつて下れ。

無頼漢の一 大將、しつかりやつてお下れ、俺達やあ、高見の見物だ。

無頼漢の二 高の知れた、朝鮮人一疋、燃り潰して、しまひなんせ！

八官 私は謝罪しましやう。

七之丞 (張り合ひ抜けして)謝罪する。



八官 今の私には、大切な仕事がある

七之丞 急に生命が惜しくなったのか？

八官 さうです、生命が惜しくなりました。

七之丞 馬鹿！貴さまの生命は俺がもらつたぞ。

八官 悪いところは重々、お詫び致しますから、助けて下さいませんか。

七之丞 (無頼漢に)八官の言葉を聞いたかい。

無頼漢の一 アハ、、、弱蟲。

無頼漢の二 朝鮮は人蔘の産地で、赤つか色がよかもんかと思つて居たら、如何かい(指さして)八官の顔の蒼さは。

無頼漢の三 月夜で、蒼う見えるんぢやらう。

大勢 アハ、、、。

七之丞 皆が、お前を笑つて居るよ、如何だ、元氣を出して戦つちや。

八官 駄目です、……………大切な仕事がありますから。

七之丞 俺の言ふ事を何でも聞けば、許してやつてもいい、そんなに生命が惜しいなら……………。

八官 聞きます。命じて下さい。……………おのぶぎの、事は思ひきりませう。

七之丞、當然だ。

八官、ごんな事を聞けばいいのです？

七之丞 俺の股を潜れ。

八官、躊躇する。

七之丞 股潜りご生命ご、ごつちが大事ぢやつてもいゝ、そんなに生命……

八官 黙つて、七之丞の股を潜る。

大勢 アハ、。

無頼漢の一 韓信の股潜りだアハ、。

八官、急ぎ去らうとする。

七之丞、八官の衣服を掴み。

七之丞 逃ぐるな。

八官 ……………。

七之丞 未だ注文が有るぞ。

八官 何んです。

七之丞 やつぱり、貴さまの生命を貰はなけりや、俺の蟲が承知出来ない。

八官 ……………ぢや、一年だけ延ばして下さい。

七之丞 いやぢや。

八官 では、半歳。

七之丞 半歳も嫌だ。

八官 御願ひです、二十日間だけ。

七之丞 まるて、唐人の商賣の様だ。

八官 (地上に跳いて) 生命は差上げましやう。

七之丞 二十日間ごは、ごんな勘定で言ふのだ!

八官 私には大事な仕事か御座ります、長崎御奉行さまご、庄屋の甚左衛門さまに差上げ

る品物を作らねばなりません。

七之丞 さう聞けば、増々嫌だ、お前を二十日間生かしておくに、その間に仕事をして、後世に名を残さうとするのだらう。

八官 私の名は如何でもいゝのです、たゞ一生二代の仕事をさせて下さい。

七之丞 お可笑な男だ。そんなに仕事が大事か？

八官 さうですとも。……(頭を地に擦りつけ)此の通りお願い申します、二十日間だけ許して下さい。

七之丞 大切な仕事であれば、猶更の事だ、俺の戀を傷つけたお前は、當然、早刻生命が絶たれるんだ、おい見て見い。(大刀を抜き、月明りに、輝しつゝ)よく斬れさうな刀を八官 戀も、信仰も、生命をも捨て、でも、私は仕事しなけりやなりません。何物も捨て

てしまひまじやう。て、二十日間だけ……。

七之丞 ならぬ。

八官 (突然、天を仰いで、両手を合せ)如何に、御主かんさまゼズ、キリシト、十字架くわすたの得功とくこう力を以て……。

七之丞 えい。

七之丞の斬り下す一刀に八官は血煙立て、斃れる。

七之丞 切支丹信者だつたな。

無頼漢の一 (火打石にて、八官の斬口を見)よかお手際ですばい。

七之丞 (刀を、眺めて、血糊を拭き、鞘に納め)切支丹の何か證據になるものを、身體につけてゐないか、改めて見ろ。

無頼漢の一、二、八官の首より數珠ごんたすを取り出す。

無頼漢の一　こんけんもんの有りますばい。

七之丞　（微笑して、數珠を受取る）陳八官奴は邪教の信者で良民を誑かしてをつた故、一刀の下に斬り捨てたと言へば、代官所よりお科めごころでなく、反つて御褒美が有るのだ。俺に幸福の花が咲いて來たぞ、美しいおのぶはもご通りに、俺の定まつた女房にして……アハ、。お前達も俺と共に、代官所へ證人になつて行つて下れ、褒美の黄金はお前達に残らず下れてやらうよ。

無頼漢の一　有難い事だ。

無頼漢の二　早やく御褒美のお金で賭博でも開きたいものぢや。

七之丞を初め、無頼漢まで大辯びにて退場する。

—（幕）—

（大正十二年五月二日作）

戯曲  
黒坊の歡樂と悲哀

戯曲 黒坊の歡樂と悲哀 (三幕)

人

ウエルト。	役人。	葡 <sup>ポル</sup>	葡 <sup>ポル</sup>	人。
ピヤアツ。	役人。	葡 <sup>ポル</sup>	葡 <sup>ポル</sup>	人。
足部仙右衛門。	阿蘭陀口通詞。			
異國。	丸山の遊女。			
淀太夫。	丸山の遊女。			
唐橋。	丸山の遊女。			

ガバンド。阿蘭陀屋敷の下僕。黒坊。  
マラン。阿蘭陀屋敷の下僕。黒坊。  
ダーラバ。阿蘭陀屋敷の下僕。黒坊。  
井上九八郎。武士。

其他。仲居、禿、帮間、藝者等。

時

元祿時代の或時の夜。

所

第一幕。阿蘭陀屋敷の廣間。ミ、海近くの土塀。  
第二幕。丸山の遊女屋、餅屋の一室。

舞臺 第一幕

蘭燈は眞晝の様に輝き、中央には角形の大卓に、南蠻更紗をかけ、山海の珍味、異國の器に盛られ、ギヤマン、の酒瓶やコップ、洋刀、等置かれてある。  
床には高價なる紅毛段通をしきつめ、周圍の壁に、油繪の額三つ程かけられ、壁には大きく窓を切り開き、ガラス窓の戸は明け放たれ、外は闇夜にて、何物も見えない。  
卓を取りまく、五人の男女は、皆丈夫そうな、烏木の椅子にかけ、酒に酔つて居る、ウエルト。ヒヤアツは南蠻服をつけ中央に、遊女異國はウエルトの横、遊女淀太夫はヒヤアツの傍阿蘭陀口直詞、足部仙右衛門は淀太夫の隣りに坐を占め、阿蘭陀煙草を遊女異國と共に吸つてゐる。

卓をや、離れて、黒坊ガバンド。マラン。ギター楽器を鳴らして居る。バンドはナルゴ  
ル、マランはセロ、ギターは日本の琴を弾き乍ら、時々節面白く咬嚼肥頰を唄つて酒宴  
の興を添へて居る。

卓にづいて居る連中は、コップを高く捧げたりして、乾盃をつゞける。

ウエルト 愉快です、愉快です。

ピヤアーツ 日本、私、大の好き、本國のホルツウゲスに居るのも、變りない事。此の國  
人、みんな情けあります。

ウエルト そうく、私此の阿蘭陀屋敷に何年も居り度い、ピヤアーツさん言ふ通り、人  
みんな、私死ぬ迄、此家で暮らす願ひ。

仙右衛門 そりや、お世辭でしやう。

ピヤアーツ 否々、お世辭心にもない賞め言葉、私大好きませぬ。

仙右衛門 しかし、御不自由勝の……。

ウエルト 否、否、反つてよろしい、初めの程、日本來た時、困つた、けれぎ、此頃すつ  
かり日本の事分ります。而して、國として尊敬いたし居る譯、ほんご、その譯ある。

仙右衛門 日本好になつて戴いた上、よく奉行所の命令を辛抱して下さるので、私は非常  
に嬉んで居ります。

ピヤアーツ (一寸擧めて) 役人少々嚴格、つまらぬ事六ヶ敷しい。

仙右衛門 けれぎも、よく命令を守つて下さるので、私はこれ程助かるか知れませぬ。

ピヤアーツ 仕方ない事です。

ウエルト 一番可笑い事、船來ます、其時の商賣、取引、口ばかりよく六ヶ敷、而して勤

定、日本商人誰も下手、よく分らない。

仙右衛門 全く、数学は盲目ですからね。

ピヤアーツ 盲目、そうく、盲目。

仙右衛門 日本美人さん如何です。

ピヤアーツ (真顔にて) 情け強い、其の上、顔美人。

ウエルト ピヤアーツさんの考へ、正しい、日本美人よろしい。

仙右衛門 ここに、異國さん、淀太夫は、丸山遊女で有名な美人です。

異國 妾そんな美人じゃ有りませんが、有難。仙右衛門さまのお世辭のい、こい。

淀太夫 あなたの馴染の月山さんがい、方よ、ピヤアーツさん、此の方の月山さんを知つて居りますか？。

ピヤアーツ 月山さん、知らない、一度も顔知らない。

淀太夫 仙右衛門さんには大熱々なよ。

ウエルト 今度、丸山に行つて、月山さん見るよい。

ピヤアーツ 明日の晩、行く、都合い、譯です。

仙右衛門 アハ、、、そんなに、あなた方が、御出になつて御覺になるやうな女じゃ有りません、アハ、、、。

ウエルト 乾盃、仙右衛門さん……………。

異國 月山さん。

ウエルト 月山さん、仙右衛門さんの爲めに、お目出度！。

淀太夫 仙右衛門さんが私に素張抜かれて、赤い顔しいオホ、、、。



淀太夫 い、きだねオホ、、。

皆のコップに淀太夫、酒を注ぎ、コップを高く手に持つ。

ピヤアーツ あなた、仙右衛門さん、何故乾盃アスタルする事しない、失禮になりますアハ、、、

淀太夫 さあ、お祝ひですよ。

淀太夫、仙右衛門の手にコップ握らせ、無理に乾盃させる。

乾盃、終つて。

ウエルト お目出度。

ピヤアーツ お目出度。

仙右衛門 何日か、皆さんの敵討をしますよ。

ウエルト アハ、、。

異國 仙右衛門の敵討はすんだが、妾は、ウエルトさんの敵討をしなくちや。

仙右衛門 こりや面白さうですね。

異國 妾が、ウエルトさんに勤める前には、花野さんご大變てしたつてね。

淀太夫、しつかり。

異國 三日前夜中の出来事なのよ。

ウエルト もう、降参します、あの珊瑚の球やる。

異國 要りませんよ、………まあ、聞いて下さい、夜中にウエルトさんが、突然、大きな聲を出して、花野、花野と言ふんでしやう。寢言に迄言ふ位、花野さんの事を思つてゐるんですもの、妾悔やしくつて、首に喰いついてやつたわ。

ピヤアーツ ウェルトさん、情沈<sup>シヨク</sup>て居る、可愛想。

異國 何が可愛想です、淀太夫さん、ピヤアーツさんにも妾の様に喰ついておあげよ。

淀太夫 でもピヤアーツさんは、寝言なんか、言やあ、しない人ですもの。

異國 淀太夫さんはピヤアーツさんに大變ね。……………(ウェルト)にそれ見て御覺なき  
い、あんたにピヤアーツさんは親切なお方ですよ。

異國、いきなり、ウェルトの手を抓<sup>ツ</sup>る。

ウェルト (痛さうに)あつ！。

仙右衛門 豪い元氣だな。

異國 元氣を出さなけりや、こんな薄情で、多情な異人さんはウーシシ苛めて、あけなく  
ちや。

仙右衛門 (ウェルトに)餘つ程、あなたに惚れて居るのですよ、異國さんは。そんで嫉妬  
してるんです。

ウェルト (嬉しさうに)何に、そんな。

異國 夜中にまで寝言言ふ花野さんは、ほんに可愛そうに、(大聲で)肺病で死んでしまつ  
て。

ウェルト (獨白の様に)全く、氣の毒な病氣だつたな、あんな優しい心の所有者が、二人  
こは居ないだらう、さりかへしのつかぬ事になつてしまつて……………い、女だつた。

異國 (ヒステリックになり)い、女……………まだ言つてるんですか？(泣き乍ら、ウェル  
トに武者振りつき)妾は、もう此處から、たつた今歸ります、仙右衛門さん手續をして  
妾を歸へして下さい。

仙右衛門 い、じや有りませんか、そんなに怒らなくて。

異國 (嗚咽して) 歸ります〜。

ウエルト 困つたね。

ピヤアーツ 異國さん、ウエルトさんは戯談言つたのです、何日も此の人は戯談言ふ性質です、分りましたか？。

淀太夫 もう、い、じやないの、あなたが今から歸へる言ふこ、仙右衛門さんがお困りだからね。

異國 ……………。

仙右衛門 如何したらいい、だらう。

淀太夫 皆さんが心配して居られるからね、異國さん、勘辨してあけなくつちや。

異國 (黒坊の樂人が、樂を奏して居るのを、眺め) 五月蠅、妾が泣いて居るのに…………。

唯方はよしてお下れよ。

ウエルト 中止して下れ。

ガバンド はい。

黒坊は無味な想に、顔見合せ、樂器を、横の棚の上にないたりして居る。

仙右衛門 (黒坊に) お前達、お酌をして下れ、(ウエルト等に) 而してもう一度陽氣に騒ぎませう。

ピヤアーツ い、考、い、考。

黒坊二人、コップに酒を注いだり、下手に這入つて行つて、果物の鉢を運んだりする。一人は大團扇にて、皆を煽で居る。

ウエルト 私、<sup>ア</sup>怒まる、……………。

異國 い、え、妾も思ひ出して、情けなくなつてしまつたので、……………ほんごにすみませんでした。

ピヤアーツ 安心してい。

仙右衛門 あんまり仲のいゝので、一寸……………。

淀太夫 いけすかない、異國さんだわオホ、、、、。

ピヤアーツ、仙右衛門も笑ひ、果てはウエルトも、異國も噴き出す。

黒坊は眞面目な顔をして、酒宴を斡旋して居る。

淀太夫 マラン。

マラン は、い。

……………

淀太夫 お前、ピヤアーツさんのお室に行つて、ビードロの阿蘭陀船の飾物の脇に、三味線があるから、すぐ持つてお出で。

マラン 承知しました。

マラン、去る。

仙右衛門 雨降つて地固まるですね。

ウエルト、頭を掻いて居る。

ピヤアーツ ウエルトさんの色男、女にあんなに惚れられて、非常に嬉しい事てしやう。

ウエルト (特意そんな顔にて) 異國さん手荒いこご、私、怖ろしい。

異國 オホ、、、、。

マラン、三味線を持来る、淀太夫取りあげて、異國に渡し。

淀太夫 さあ、先刻のいちや、いちやの罰よ。

異國 まあ。

淀太夫 久し振りてい、じやないの。

異國 妾、駄目よ。

仙右衛門 あなたでも、恥かしがる事を知つてゐるんですか？。

異國 随分ね。

ピヤアーツ 三味線の音調、東洋楽器での權威、異國さん頼みます。

淀太夫 遠慮しなくつてさ。

異國 忘れてしまつてゐるんですもの。

淀太夫 何にでも、い、じやないの。

異國 何がい、かしら。

淀太夫 紅毛鳥は……………。

異國 ありや、六ヶ敷くて。

淀太夫 い、じやないの。

異國 小唄の……………(考へる)

淀太夫 参らうやくは。

異國 さうく、あれをやりませう。

仙右衛門 謹聴、々々。

異國、三味線を、弾き初め唄い出す。

異國 参らうやく、ハライソの寺に、

ハライソの寺さは申すれど、

廣い寺さは申すれど、

廣いせまいは、わが胸に在り。

皆、手を打つて、喝采する。

ピアーツ 上手、上手。

仙右衛門 ウェルトさん、なか／＼旨いでしやう。

異國 駄目ですよ。

隣室の南蠻時計、チン／＼と鳴り響いて来る。

仙右衛門 南蠻時計が鳴つた。もう、夜も更けましたから、お開きに致ししやう。

淀太夫 では、室に歸りましやうよ。

ピヤアーツ それがいゝ。では、いゝ晩を過しましやう。

ウェルト いゝ晩で有りますやうに。

異國 お寢みなさいまし。

淀太夫とピヤアツ。異國とウェルト腕を組み乍ら去る。

仙右衛門 お前達も早やく、休息したらいゝ。

ガバンド 有難存じます。

仙右衛門 (去り乍ら) 阿蘭陀口返詞いふのも、骨の折れる役目だなあ。

仙右衛門、去つた後に、三人の黒坊、椅子に、だらしなく腰かけ。

ガバンド (大欠伸して、両手を伸し) あゝゝ。やつゝ樂な身體になつたぞ。

マラン つまらない／＼。

ダーラバ 仕方のない事だ、お酒でも飲んでやれ。

三人は、卓上の酒や、料理を喰べ初める。

マラン 随分暑い晩だね。

ダーラバ 俺達の國より餘つ程蒸暑いなあ。

ガバンド 全くやりきれない。俺達の國は日中こそ、地が焼けつく位の暑さだけさ、朝も夜は涼しいからなあ。

マラン さうだとも、大きな椰子の葉に、丁度、浪の音がするやうに、ザワ／＼言ふあの涼しい風が吹きつける事は忘れられないんですもの。

マラン マンゴだの、バナナだの、椰子の汁だの………喰いたくつて仕様がないうぞ。

ダーラバ 俺も此間なんぞは、ドリアンの森の中で、白孔雀を遊んで居た夢を見たよ、早

やく許されて歸へつて行きたくつてたまらない。

ガバンド 今頃は、故郷で新月祭の準備で、村の若い女や、男達が、美しい寶石を集めてあの火踊の時に、見せびらかしてやらうと、苦心して居る頃だらうのう。

マラン そうだとも、大きな太鼓や、よく鳴り渡る銅鑼を叩いて、大勢の仲間が、お月さまの唄を唄つて。

ダーラバ 唐芥子を煮つめて、黄色のが、真紅になつてドロ／＼した奴を、手で弾ひいて喰ふ、イリツピ入りのライス、カレーが、旨いだらうよ。

マラン ガバンド、俺達の身上話は此間言つて聞かせておいたが、お前のを、今夜聞かせて下れないか？。

ガバンド 俺は言ひたくないんだ、それを話すに悲しくなるから。

ダーラバ い、じやないか、出島屋敷の中の大勢の奴隷達で、かうやつて馬來生れの俺達  
二人ミ、兄のやうになつてるお前ミの仲じやないか？。

ガバンド じや、話ししやうかい。

マラン そうしてお下れ。

ガバンド 俺の生れたところは、咬喰吧さ。

マラン うん。

ガバンド 何んでも、俺の親ミいふもの、顔を見た事がないんだ。

ダーラバ 如何してだい。

ガバンド 俺あ、初めから奴隷に生れついて來たんだね、五つの年に、街から街を踊つて  
歩く、旅藝人に責められたのださ。

マラン 氣の毒だ。

ガバンド 其で、よく考へて見ても十歳位より、以前の事は分らないよ、たしか十をか十  
一かの時だつたらう、ジヨクジヤミいふ賑やかな都に出て行つたのは………そのジヨ  
クジヤでは大變な人氣が有つて、俺達のやうな下つ端役を勤めるものに迄、毎日のやう  
に見物人から、砂糖菓子や、なんミいふのか知らないが、甘い／＼水を貰らつたりして  
居た。親方、つまり興行元だね、その親方の顔なんか、今では忘れてしまつて居るんだ  
が、大きな辱をビク／＼座撃したやうに、笑顔をして居たよ。突然親方の笑顔を言つて  
聞がせるミ、餘程優しい人間のやうだが、よくあんな奴に有る様に、それは／＼六ヶ敷  
い人間だつた、その貪慾な人間がニコ／＼やるんだから、大した儲りかたゝつたゞらう。  
マラン お前はそんな役が十八番だつたのかい。



ガバンド 踊の名なんて記憶して居るもんかい。………<sup>ヒョウブ</sup>突差したらクリシナ様の傳記の踊りで、俺が仙人に連れられて居る童にだつたかも知れない。

マラン あんまりお前にしては、よすぎる役じゃねわか。

ガバンド 馬鹿にするなよ、俺は子役では天才だと言はれて、大變可愛お坊ちやんだつたのよ。

ダーラバ アハ、ハ、ハ、さぞ可愛いお坊ちやんだつたらうアハ、ハ、ハ。

ガバンド 巫山戯るミ、さきは言はないよ。

マラン それから。

ガバンド ジョクジャ………其處の街では大變長い間興行して居たんだ、で、或日の晝頃、もう太陽が天幕のなかにカン／＼輝りつけてる頃、一人の立派な老人が尋ねて來た

んだ、而する之間もなく、俺はその老人に連れられて、旅藝人の中を出てしまつたんだ………バツの大火山が盛んに、火を吐いて居る、直下の街のツユリベン迄、牛車でその老人と長い間、廣い砂漠のやうな道を揺られて行つたんだつた。………チイ、酒を注いで下れ。

マラン 意張つたね、よし、酒を注ぐぞ。

ガバンドは旨そうに一息にコップの酒を飲み干す。

ガバンド 思つたより、いゝ家だつた、入口は仙人掌に圍まれて、大門を潜るこいろんな美麗な花が咲いて居たよ………(夢見るやうにして)そう／＼、いゝ香りの蘭が多かつた………其家に着いた夜から、俺は美しい絹の衣服に着換へたり、皮に刺繡の花模様がついたりした靴を履かせられたりして、すっかり貴公子になつたんだね。

マラン お前が。

一七四

ガバンド そうだこも、だが其處には十人あまりの男の子が居たんだ、一體何ぞ思ふかい。  
……美しい男の子ばかりだよ。

ダーラバ 金持の家だらう。

ガバンド 浮れ男共が、集つて来る、陰間カゲマの家だ。俺を連れて来た老人がその主人で、十人あまりの男の子が陰間だ、而して俺も、その陰間まに旅藝人の親方から、高い錢で買はれたんだよ。

マラン その陰間が如何して、紅毛人の奴隸になつたんだい。

ガバンド 紅毛人の奴隸よりや、陰間の方が餘程いゝね。

ダーラバ さうだつたらう。

ガバンド その老人を主人にした、陰間の時代に面白い日が續いたよ、記憶の難い臺詞を暗記したり、身體の怠い時に踊つたりせなけやならない踊子より、何れ位樂で、呑氣てお客達からチャホヤされたか？ お前達が考へても分るだらう。

マラン 陰間と言へば、俺は買った事はないが、大した代物だからね、俺達見たいな貧乏人は、一生買ふ事は出来ないのだから……。

ダーラバ さうだこも。

ガバンド 男の客ばかり考へてるに相違うんだよ、後家だの、嫁に行き逸れた娘の、淪落の味を占めてる金使の荒々しい貴婦人だの、女のお客も可なりあるのだよ、だけこ一體に女の方は、割合にお金が長くつゝかないもんだから、男の方の様に尊重がられては居なかつたよ。

一七五

マラン 美人も遊びに来たかい。

ガバンド 陰間なんか買ひに来る奴に美人なんて、そんなに多くは来ないね、女言ふものは何處たつて、お金なしで男から可愛がられるんだから、やはりジョクジャの女の客も男に振り向かれさうな女は、まあ来なかつたと言つてもいゝ位の不別品揃だつた。そう言つてしまふ一人の美人にもめぐり會はなかつたと思ふだらうが、たつた一人、それはそれは怖ろしい程の美人が或夕方ひよつくりやつて来た、お前達知つてるだらう、俺達の信仰するお寺に参詣すれば、寺院の中の壁畫を。

ダーラバ 神さまの一代記の繪畫かい？

ガバンド さうだ、その一代記の中で、悪魔が、妙麗な女に化けて、神を魅力で、口説き落そうといふ段取さ。

マラン そんな風の美人だつたのか？

ガバンド 美人だとも、首、鼻、両手に高價な黄金の輪や、鸚哥、瑠璃鳥の羽に有る様な輝ききつた寶石をつけて、桃色の薄絹を頭から冠つてさ……俺達は眼を見張つて、あまりに贅澤な衣装さ、あまりに美しい容色に眼を見張つたよ、而して俺が、その女に買はれたんだ。

マラン 羨やましいな。

ガバンド それから言ふものは、せつせき通つて来て下れたね、その女には相當ビョウした夫が有つたのだ、何でも、役人で、王さまの寶物庫を預かつてる奴で有つたさうじゃ。ダーラバ 女の名は誰言ふんだい。

ガバンド ミサイサミ言つて、美人の名の高い女だつた。女が来るに何日も、小さい、い

い調子の色で、水牛の唄や、眞珠の唄を歌つたよ、……………まあ二人の戀は火の様に熱度が盛んになつたと思ふて下れ。

マラン 何か奢れよ。

ガバンド フ、ン。……………二人が鴉片を吸つて、足も手も組み合せて寄床に眠つて居る頃、大男が立つて居たよ、すぐ前のミこころに。

マラン それが、亭主かい。

ガバンド その通りだ、俺はすぐ何も分らなくなつてしまつた……………意識がハッキリし出した項には、俺は同じ仲間の陰間の連中や、老人から取巻かれて居た、大男から散々擲ぐられて、氣絶したんだなあ。

ダイラバ しかしよく、殺さんなかつたものじゃ。

ガバンド 陰間さいふものは、豪い勢力が有つた、ミ言ふのは、最負にして下さる方には大將や、大臣、さいふ風に、その國の貴族が多かつたので、みんな事をしても斬られたり、殺されたりはしないんだ、俺達を殺したら最後、殺した奴は、あの大火山の噴火口に逆さに吊されて焙り殺されるんたから。

マラン お前の話は、俺達の村の傳説以上に面白いぞ。

ガバンド その出来事が有つてから、怖ろしくつてたまらないので、お客につれられて、象に乗つて行く時でも、内心ビク／＼ものだつた。……………そんな風で其處に何年暮らしただらう(一生懸命考へての後)裏庭の一等小さい椰子の樹が、節を四つ作つたから。さう四年目になるよ、その四年後の或る日だつた、まだ晩の疲勞のまゝ、グツスリ眠つて居るミ、突然大地震が起つた、お前達も聞いて居るだらう、地震は年百年中の名物だ